

NHK学園生涯学習フェスティバル

松山市俳句大会

平成三十一年二月二十四日(日) 午後一時～四時

松山市民会館 中ホール(愛媛県松山市)

第一部

一、開会あいさつ

NHK学園通信講座センター長

中本 敦

伊予銀行取締役頭取

大塚 岩男

一、選者紹介

一、対談「俳句の未来」

宇多喜代子

夏井いつき

―休憩―

第二部

一、表彰

一、選評

NHK学園俳句講座アドバイザー・「草樹」

宇多喜代子

NHK学園講師

神野 紗希

「いつき組」・「藍生」

夏井いつき

NHK学園俳句倶楽部講師・「山茶花」

三村 純也

(五十音順)

一、当日句「松山の春を詠む」入選発表

神野 紗希

三村 純也

総司会 フリーキャスター

北林きく子

い あ い さ つ

NHK学園理事長 浜田 泰人

本日ここに「NHK学園生涯学習フェスティバル 松山市俳句大会」を、皆様とご一緒に開催させていただきます。

今回お寄せいただいた作品数は、自由題、題詠「人」あわせて六千三百六十句にのほりました。お寄せいただいた俳句の一つ一つは、作者おひとりおひとりの心のうちに、この文芸が深く根を下ろしていることを教えてください。日々のくらしと経てきた人生経験を見つめ、俳句を通してみずからの言葉と心のあり方を探求されておられる方々がこんなにも多くいらつしやることを知り、心より感銘を受けております。

わが国の古い伝統の上に築かれた短詩型文芸は、時代が変わってもその意義は変わりません。

昭和五十六年に開設された俳句講座は、これまでの三十七年間に、五十五万人を超える方々が学んでこられました。この流れがさらに大きく豊かになっていくことを願い、講座内容をはじめこのような大会や俳句学習の旅（スクーリング）など、教育文化事業の充実に、なお一層努めてまいりたいと思っております。多くの皆様のご参加とご支援を、よろしくお願い申し上げます。

なお、本日の大会大賞三作品は、各地で開催される大会の大賞作品とともに平成三十一年度の文部科学大臣賞候補作品となります。

最後になりましたが、大会の開催にあたり、選者の先生方、ご投句いただいた皆様、ご協力をいただいた愛媛県・松山市ほか関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成三十一年二月二十四日

対談・選者



宇多喜代子（うだ きよこ）「草樹」（そうじゆ）会員代表 NHK学園俳句講座アドバイザー
昭和十年山口県生れ。「獅林」を経て「草苑」（桂信子主宰）創刊とともに入会。桂信子没後に
創刊した「草樹」の会員としてその精神を継承。第二十九回現代俳句協会賞、第三十五回蛇笏
賞、第二十七回詩歌文学館賞受賞。
読売新聞俳壇選者。「NHK俳句」選者。句集『夏月集』『象』『記憶』『宇多喜代子俳句集成』
『森へ』など。

一瞬が一瞬を追う雪解川



夏井いつき（なつい いつき）俳句集団「いつき組」（いつきぐみ）組長 「藍生」（あおい）会員
昭和三十二年愛媛県生れ。第八回俳壇賞・第五回中新田俳句大賞・第四十四回放送文化基金賞
受賞。句集『伊月集籠』『伊月集梟』、著書『おウチde俳句』『花の歳時記』『NHK俳句 夏井
いつきの季語道場』など。平成二十七年五月より、初代俳都松山大使。

錫杖のいつぼん春の野を打たば

選者



神野 紗希（こうの さき）現代俳句協会青年部長 NHK学園講師
昭和五十八年愛媛県生まれ。高校時代、俳句甲子園をきっかけに俳句を始める。平成十四年、第一回芝不器男俳句新人賞坪内稔典奨励賞受賞。句集に『星の地図』『光まみれの蜂』、著書に『日めくり子規・漱石 俳句でめぐる365日』（第三十四回愛媛出版文化賞）『初心者にやさしい俳句の練習帳』など。

水脈も葉脈も春てのひらも



三村 純也（みむら じゅんや）「山茶花」主宰 NHK学園俳句倶楽部講師
昭和二十八年大阪府生れ。中学時代より作句。下村非文、清崎敏郎、稲畑汀子に師事。（公）
虚子記念文学館理事。（公）俳人協会評議員、（公）日本伝統俳句協会会員。大阪芸術大学教授。
大阪俳人クラブ副会長。『常行』で俳人協会新人賞受賞。句集『Rugby』『蜃気楼』『観自在』『二（はじめ）』など。

薄氷光となつてしまひけり

全作品を名前を伏せて、全選者にそれぞれ入賞入選作品を選んでいただきまし
た。大賞、特別賞は特選の中から選の重なりを考慮しつつ、NHK学園大会事務
局で決定しました。

NHK学園松山市俳句大会大賞

松山の空の一碧冬に入る

東京都 藤岡定子

懐炉抱く何も怖くはないと思ふ

埼玉県 平井萌黎

△題詠「人」▽

風紋や人待てば来る冬の鳥

岡山県 小西瞬夏

松山市長賞

土竜また銀河を渡る夢を見る

高知県
宮口和子

愛媛新聞社賞

辣蕝のひとつ転がる老人の家

石川県
茶谷一花

伊予銀行賞

風音の高く過ぎゆく晩稻刈

大阪府
伊藤とし子

宇多喜代子 選

特選

松山の空の一碧冬に入る 東京 藤岡定子

他から松山を訪れた人の挨拶句か、または松山在住の方の立冬の日の感想か、いずれにせよ「空の一碧」がまことに明解で生き生きしている。雲ひとつない真つ青な空。からつとした気持ちのいい松山の立冬の空である。この句、目で読むより声にして読むほうがいい。

大事みな小事となりて暦果つ 広島 林すみ

今年も終りの暦を前に、過ぎた一年をふり返る。いろんなことがあった。どうしたものかと思案で眠れなかつたあの事も、今となつてはとるに足らない事に思われる。時間という妙薬がそう思わせてくれるのだろう。そんな感慨にふけりつつ、年の終りを迎えている。

……題詠「人」……

人も見るロボットも見る冬銀河 岡山 小橋辰矢

人とロボットが共生してゆく日の一場面がさりげなく表現されている。人とロボットのどちらが優位に立っているわけでもなく、同じ目線で冬の夜空に流れる銀河を見ている。もしかしたら、このロボットも人と同じように「美しいなあ」と思っているのかもしれない。

秀作

父と子に異なる風や冬に入る 千葉 岡田春人
 水中をくるりくるりと落椿 群馬 飯塚柚花
 くぐり来し花を眼下の天守かな 岡山 加藤三雄
 手の機嫌水の機嫌や紙を漉く 千葉 下村たつゑ
 冬の日や昼のやうな夜のやうな 石川 阿部薄荷光
 稲刈りしあとの匂ひの広さかな 滋賀 馬場弘子
 つばめ来る郵便局のつばめ来る 岐阜 金井辰義
 ひとつづつ音の消えゆく冬隣 新潟 横尾浩
 冬うららうつらうつらの母と猫 福岡 河野重雄
 銀杏散る六百年の高さより 北海道 岩崎とし恵
 冬うららら鯉がゆらりと橋くぐる 大阪 木村良昭
 振り返る鹿にきれいな眉ふたつ 大阪 清島久門
 数へ日のふくらんでくる商店街 栃木 関口ミツ
 半島の先の先まで大根引く 兵庫 平尾美智男
 尖る葉のみな天を指す葱畑 栃木 井坂史子
 始まりはいつも曖昧走馬燈 福岡 山本則男
 子規宛の虚子の文読み春惜む 大阪 奥野とみ
 対岸に原子炉のあり小鳥来る 大分 高田英子
 新宿も高田馬場も小春かな 東京 伊集院浩子
 島島を遠く近くに良夜かな 神奈川 高橋俊彦
 ……題詠「人」……

よく笑ふ人を真中に初写真 石川 蔵 堯子
 人類のそののちのこと鯛雲 東京 此花 悠
 人間も枯草も空へ直立す 高知 若下 優帆
 除夜の鐘一打は遠く住む人へ 福岡 川口 茂則
 人文字のひとりとなりぬ鱗雲 千葉 輝

▼佳作▼ 掲載は氏名五十音順です。

水きらら目慣れてきて鮭千匹	四十物文代	肩の雪かるく払ひて神の前	石丸美代子	たをやかな雨となりたる蜜柑山	大垣鹿乃子
空の月川面の月に出会ふ橋	青木 孝子	一村に水の記憶や踊の輪	磯崎ゆきこ	コスモスの真ん中子らのかくれんぼ	大川 宣子
浅間岳冬耕広し黒かりし	青野カツ子	広々と冬田の横を新幹線	伊丹 妙子	池の端に本読む人や漱石忌	大久保文夫
初時雨樹下の灯籠まだ濡れず	赤松 彌介	それぞれの色の冬帽六地藏	市川 廉	一村のどっと動くや秋祭	大久保宥子
天地人葱一本の一行詩	浅山美津子	山彦のよく透きとほる枯木立	伊藤 孝一	あたたかや満員となる繩の汽車	太田 喜子
啄木の詩集に汚れ夕紅葉	麻生 勝行	都府楼の柱石の影冬に入る	井上 宣孝	細波の松山港の冬紅葉	大沼 遊山
ミカンノハナサクの電報入学す	阿部千栄子	鮭上る川一面を荒立てて	井口富士夫	薄雲の中に真白き冬日かな	小柏 久男
郵便も電話も来ぬ日小鳥来る	新井 和生	息こらえ身を沈めゆく袖湯かな	今井 善衛	けん玉に遊ばれてゐる小春かな	岡田 邦男
子と拾ふ木の実百まで二百まで	荒井ハルエ	大空の雲にも触れし松手入	岩上 利一	海おぼろ旅のいづこも郷に似て	岡田 康子
霊山の水のきらめき新走り	荒川 清司	暖かや八つ違ひの兄おとうと	岩崎シナエ	山門をくぐる背中に木の実降る	岡野 弘子
すんなりと話まとまり酔芙蓉	有澤 嘉晃	草を引く背に太陽の迫りくる	岩淵 純子	本棚の著書に日当る菜の花忌	荻野 邦子
運ばる湯葉や豆腐や時雨けり	粟村 勝美	走り根の行きつ戻りつ散紅葉	上田 雅子	捨ててまた拾ふ一句や春炬燵	奥村 利夫
機音の今も秩父の秋遍路	飯岡 敬子	餅配り雪の戻りとなりけり	上村 佳与	小魚の小さく光る十二月	小倉貴久江
飲んで寝て起きて一人冬に入る	飯塚 孝	秋高し路面列車の汽笛かな	内久眞也	どこまでも風駆け上がる鷹の天	尾崎 妙子
いち早く野仏の辺の草青む	飯野 定子	観音の空ひろらかに寒夕焼	梅原 清音	山里に暮し一徹そぞろ寒	小澤 藍加
月の出の汽水揉みあふ盛夏かな	飯山 昭	朝刊の来た音のして秋深し	漆原 みつ	鯛雲四角の空に入りきらず	小田富美子
風邪もらふ異国のやうな東京に	山内 雪	春匂ふ色に光に音に風	喜多 輝女	大足の足跡残る植田かな	小田 幸美
チッキの荷運びし駅の大夕焼	池谷 硬司	カーテンに光あふるる四月かな	榎戸 源茂	日の丸に四角の折目昭和の日	尾堤 輝義
小鳥来る子の赴任地の投句箱	池田 和子	おそろおそろ値切つてみたる苗木市	遠藤 東子	空色の触れあいてこそ秋桜	片上 強
初茜はやも飛び立つ影一羽	池田 徹子	滝音の細りて山は眠りけり	遠藤 操	虫食ひの子規の文机冷まじや	加藤 清美
着ぶくれて待合室の固き椅子	石原 良彦	山頂の城冬雲を従へて	大内 洋子	二番町あまたのあかりしぐれをり	加藤 鉉物

十二月猫のとろんとする重さ	加藤 隆子	観音の傍の尾花や風とほる	久保田敏子	大鳥居蝶と一札歩き出す	実沢 愛子
花遍路花を背に一の寺	加藤三恵子	満月のゆらめく亀の影ふたつ	熊田 人並	大富士の風に乗りくる小雪かな	佐野 延子
嬰兒の金魚と同じ口をする	金子 惠美	絵のように張戸にうつる小鳥二羽	栗田 優子	返り花海みはるかす寺の山	佐野 涌子
短日や柱時計の急かす音	上内 義則	緑陰の石段に風かすかなり	栗原 和子	母と義母命日近し石路の花	重光 寛子
朝刊を大きく開き小春空	紙田 照子	首出して青首大根らしくなり	久和原 賢	炎昼や水飲む猫の舌の音	篠原 茂隆
朝靄や野猪と遠き眼を交はす	河鱒 直	真ん中に松山城の良夜かな	劍持 紀夫	汽車を待つ長椅子かたし夏の月	柴田 惠象
雁来紅や舟を売るとか売らぬとか	三泊みなと	これよりは日和だのみの蕎麦の花	神谷 かよ	充たされてなんでさびしき春の宵	芝田 太
蓑虫のびくりと動く日和かな	岸下 庄二	降るやうに来て散るやうに去ぬ小鳥	小柴 智子	朝刊のぼとりと届く冬隣	清水 慧美
絮すべて風に放ちて鼓草	岸田 尚美	物の音響きやすくて秋の暮	小島 和子	落蟬の生国いずくとも知れず	清水 仙里
窓際に猫の加はり月の客	岸田 尚美	柿落葉従ふ風の通りけり	小玉 洋一	暮れぎはの引戸の軋み冬近し	清水 孝雄
影もろとも水に折れたる枯蓮	岸田 尚美	母の忌やさくら散る道図書館へ	小西 清香	やうやくに冬日温もる大櫓	清水 洋
海渡る風を乗り継ぐ秋の蝶	北浦 敏子	地球青し瞬くたびに秋の天	小西 瞬夏	けふもまた雪搔く一と日明けにけり	城山 憲三
行間の広き詩集や冬木立	北島 孝子	瀬戸の春島から島へ橋光る	小林 英樹	予讚線風のふりこの烏瓜	神野 信美
剪定終え風の青さの中に立つ	北村タカ子	百千鳥今日は良きことありさうな	権田 重子	日の当る八手の花の纏ふもの	末永あつし
躓ける石に声あり寒早	北村タカ子	枯草の中よりボール出てきたり	近藤 静	よみかけの一書に戻る夜長かな	菅原 孝子
手を振れば友の返す手春近し	北村タカ子	脈を診る瞳は秋の山を見る	近藤 幽慶	寝転べば秋天のまんまん中に	鈴木 涼美
梅一輪空の硬さをほぐしけり	木下 薫	一本の轍のひかり雪の原	近藤 英明	川底の石まで透ける寒露かな	鈴木 眞嘉
打ち水の手のよく動く右左	貴山 浩美	暖冬や赤い実いっばいいたまま	才田 澄恵	億年も生きて来たよと銀杏黄葉	川瀬 楓香
なんとなく始末に困る赤い羽根	清島 久門	置石にしがみついたる野分かな	榊原 初子	一ひらの花を残せり傘の上	青鬮魚
初冬の湯屋に薨の反り返る	清島 久門	帰り花楽しきことの予感かな	坂田 慶子	畑の辺の譜代の黄菊咲きにけり	関根 瞬泡
寝不足の目に鶏頭のまくれなひ	草野 准子	水澄むや群れなす魚の影はやし	佐々木敬子	見なれたるどの庭木にも夏来たる	曾我部志寿恵
冴ゆる夜や手鏡にある指の跡	忽那 早苗	スカートので丈揃ひたる入学式	貞住 昌彦	案山子より骨抜くやうに棒を抜く	曾根新五郎
道問へば風花を添へ京言葉	國井 泉車	ゆく春を追って荒川土手をゆく	佐藤 春夫	北岳の尖峰一と突天高し	高岡 榮子

波音の小さく大きく神迎へ	高倉 早苗	山頭火行き放哉の来て時雨	藤堂くにを	隙間より沼の光を冬木道	西村 英雄
寒林をくぐる一径誰か行く	高瀬 竟二	初雪や白馬連峰澄みわたる	常盤 さち	問診に嘘少しつき暮の秋	日光 正春
小包を解くやごろごろこぼる秋	高塚香代子	窮屈な洋服ダンス冬に入る	徳永 陽子	指先の感触たしか松手入れ	二藤 覺
敗荷の浅瀬の中に立ち尽くす	高橋 純雄	山の端に雲の集まる冬はじめ	徳見 淳子	物影の無き千枚田冬雲雀	二橋 康男
越後よりどすと届く今年米	高橋 和湖	島一つ若葉の山となりにけり	富沢 昌晴	黄金虫平らに光る轍かな	額田 昌安
潮匂ふ宮司に倣ふ茅の輪かな	高原 晴子	理髪店に逆転時計冬うらら	友田 哲郎	落日の花石路の黄は昏れぬ色	布野 幸子
天声人語読む時かすか朝の虫	田口 朗子	子規の墓羽音大きな冬鴉	友田 美美	山深き平家の里や懸大根	能田 孝昌
秋高し天に赤子を抱き上げて	武井 猛	一年生さつと手を上げ横断す	寅屋 照夫	庭石の乾きや冬の来てをりぬ	能田 孝昌
瀬戸内のつるべ落しの夕陽かな	武田 喜治	挨拶のお辞儀深々お正月	中江 秀任	冬の蜂明るい方へ動きけり	能田 孝昌
古びたる表札一つ暮の秋	田所 咲子	長き夜やふと揺らぎたる子の遺影	中川 結子	声掛けて声かけられて秋日傘	野田 利勝
茶の花の盛りとのみの一筆箋	田中 里香	渦潮の渦が渦追ふ今朝の秋	中里 芳夫	駅弁を買ひ銘菓買ひ旅小春	野間 泰子
天空の奥に未来凶鷹渡る	田中 俊	裏富士の闇かぶさりて吊し柿	永島 文江	夏料理筧に山の水を引き	野村 秀遊
夕焼けに並ぶ風車や佐田岬	田中 左海	稲を刈るにほひ聞ゆる棚田かな	永田 満男	爽やかや海を見下ろす矢倉跡	野村 朴人
煮凝りや日本海を取りくずす	谷口 一好	ひと雨のあとの入り日や曼珠沙華	中根 武郎	胸高に装ふ姉妹針供養	橋本 房子
空高し子規の放ちしホームラン	田村 昶三	夕時雨神住む島を遠くせり	中山 富子	雪割草生きる力に一病も	濱田 和
弥次郎兵衛少し傾く秋の暮	田村 昶三	男手を借りて大根引きにけり	成木れい子	妹の荷にいつばいの蜜柑かな	濱田 朋子
四十雀獅子像の中住まいけり	多良間典男	弁当に四隅ありける小春かな	名和 永山	パレードに狼も居てクリスマス	濱田眞知子
占師に耳誉めらるる花の下	千原 道子	美しき数式一つ鳥渡る	新野美佐子	草じらみ服のほつれに遊びたる	原 美知子
寒餅を沈め膨らむ甕の水	塚本 治彦	秋の浜魚だ貝だ網に焼く	西川 金治	秋高し海一望の無人駅	平岡 啓助
風に揺れ言葉に揺れる曼珠沙華	土屋 詔子	国境の天地を跨ぐ遍路かな	西川 たもつ	秋微雨見知らぬ街に降り立ちぬ	平田 柚月
夕月や母と過ごした万華鏡	都築 季子	草笛で少しこの世を膨らます	西川 草笛	あざやかな影と光の秋日和	平野 千江
秋天やゆるやかに描く鳶の円	寺西 光子	秋蝶の呼吸幽けき野を来たり	西島 晴治	喉元に突きつけられて曼珠沙華	廣田 花伝
由緒ある地名が消えて年の暮	寺畑 好春	一行にはぐれて怖し芒原	西村 妙子	裏庭の高きに高く紫苑咲く	弘中 薫子

でこぼこの稚児行列や冬の虹	弘中 典子	我先に寄り来る鯉や春近し	味村 京子	平成の案山子昭和の案山子かな	横田青天子
天辺に墓石の座る蜜柑山	福田 優子	丹精を高く積み上ぐ今年藁	宮崎 清美	林檎の香段ポールから躍りでる	吉田 春代
大樽を転がし洗ふ小春かな	福元 敦子	手に受くる空の重さよ牡丹雪	宮崎 清美	八方の風も受け入れ芒原	吉積 漫歩
水の輪を空に広げし水馬	藤枝 信雄	初日の出海山河の光かな	宮原 岩男	安曇野の夜明けは寒し水の音	吉野 正一
新しき菜箸の先淑気かな	藤巻 佳子	御陵まえバス停に咲く赤のまま	向井 昭子	身ほとりに物のふえゆく冬初	米田 陽子
われに父やさしかりしよ亥の子餅	藤原 和子	小鳥来る角の欠けたる鬼瓦	村下 満	蒼空に風の音する一位の実	怜美
流木に吹く風白し秋の浜	測野 栄子	四辻に風の重なる春一番	室 達朗	男みな逝き晩年の曼珠沙華	若井菫津子
水底の藻の立ちゆれて水澄めり	船越 光政	麗かや犬の散歩に弾みつ	持田 市朗	筋交ひに靴跡のある冬田かな	若林 絹代
本館より通り見ている子規忌かな	古川 照子	国境を越えたんぼの絮ふはり	百田登起枝	冬はじめ昭和の家を解体す	若林 敬子
神宿る鳥凧の果ての果て	外村 勢佳	かたぶくはたんぼの茎また地軸	百田登起枝	……………題詠「人」……………	
老木の瘤の若芽は天を向く	細田 佳道	旅人の訛加はる芋煮会	森 譜稀子	せかせかと人戻りゆく針供養	赤松 雅子
おのづから揺れ白萩のこぼれけり	本田偉佐夫	鉛筆を削るにほひや冬の昼	森 瑞穂	人日の校長室の明りかな	荒尾るみ子
冬紅葉山の日一樹一樹へと	増田よしこ	千年のいてふ一夜に散りにけり	森田 英子	血脈は薩摩隼人よ月おぼろ	有馬 紫秋
冬空へ登る石段角丸し	さとう菓子	樹冠の輪透かし広がる秋の空	森野 蘇芳	外つ国の職人来たり小六月	粟屋 暁目
林檎剝く円周率の果てしなき	松井 治美	沈む陽に青首大根のびあがる	八木 規子	小春日や人疑はぬ自動ドア	石川久美子
自動ドア開く花びら先に入る	松浦 勝	電飾の道のうしろの冬の闇	矢口 桃子	昼日中うつらうつらの菊人形	石堂 秋華
落柿舎は暮色の中に芭蕉の忌	松岡 孝子	一山の紅葉眼の中なだれ込む	矢澤 綾子	鳥唄に流人の嘆き鳥渡る	伊勢 埴大
太陽を吸いつくしたる蜜柑山	松本美美子	実の一つ生らぬ柿の木柿紅葉	屋代 義男	枯れ急ぐものの中より人の声	伊藤恵美子
牧牛の匂ひ残せし草紅葉	松本 喜雄	子が並び蜜柑が並び皆個性	柳澤 友香	杖の人追い抜いて行く秋の暮	伊藤 忠
秋灯の崖に張りつく蟹の町	松山美津子	シリウスの昇りて夜学果てにけり	藪田 拓司	寄せ鍋の一人欠けたる家族かな	岩野 記代
銀杏を天の恵みと拾ひけり	丸山 竹野	踏み鳴らす三鬼の郷の霜柱	山口かずお	冬帽子改札口に人を待つ	宇佐美和子
真青なる空に消えゆく朝の月	三上 照昭	菊日和和服姿とすれちがふ	山本 ひろ	打ち水や思わぬ人の声がして	梅田 松子
風の音に秋耕小さくはじめたり	水谷 洋子	冬のばらさびしさは今天辺に	行藤 郁代	田仕舞の煙の中の人の老ゆ	梅本すみ子

桜見る人を見てゐる露天商	岡田 邦男	老人と老人がいて草紅葉	須佐はじむ	家族でも他人でもなく石路の花	菱沼多美子
曼珠沙華一遍上人生誕地	岡田 貞子	茶の花を語る人声やはらかし	関根 瞬泡	夕端居星をかぞへて二人かな	平地美代子
野の末に人語及ばず冬の虹	岡田 康子	窓に月四人部屋なる小宇宙	曾我部志寿恵	菊日和人馬一つの影となる	福田 優子
対岸の人へ大声御慶述ぶ	尾崎 妙子	見合つては石鹼玉吹く二人かな	高木ヤエ子	三人の記念写真に小春空	藤井みゆき
冬田打ち世にも人にも遠くあり	尾堤 輝義	接待の人皆やさし秋遍路	高畑 半身	人混みの中の絵日傘高く持ち	藤田ミチ子
欲しいのは一人の時間散紅葉	金澤 恵子	柚人に径たづねけり花の雲	高原 晴子	人拒み冬木は天にひかり合ふ	伏木 ケイ
人びとのこゑ高らかや五月祭	河田 公枝	一つの灯分けて二人の夜長かな	武井 猛	人類のうなじは白き月夜かな	前島 康樹
義経も静御前も菊人形	菊地 孝也	人垣のここにも出来て街師走	竹内はるか	楽人の楽器の光る秋の夕	益子 浩一
ここよりは女人禁制紅葉散る	北村タカ子	切干のむしろ十枚婆一人	黍野 恵	撮る人も撮らるる人も祭り顔	増田 信雄
人ひとり見えぬ里曲の柿日和	木下 恕子	紅葉狩りに解け込む夕日かな	千代田路子	また一人遍路姿の道後の湯	松本よし枝
花冷の愚陀佛庵に人の声	清島 久門	山茶花の散るちる人を待つ時間	塚田佳都子	人の死に男焚火を囲みけり	溝淵 淑
萩を掃く箒が二本人二人	清島 久門	人弱し人恐ろしや原爆忌	築地 夏美	バス停の二人を照らす冬の月	溝呂木勅忠
広島や人は晩夏の影を帯び	久保 厚夫	いつまでも手を振る人に秋の風	都竹 祥子	秋も行く親しき人も妻も逝き	緑 利彦
人混みの胸の高さに愛の羽根	郡司 紀子	亡き人も平安なるか梅一輪	中川 月見	畦道を報恩講の人の列	宮崎 尚範
風紋や人待てば来る冬の鳥	小西 瞬夏	枯芝原二人の影の長くあり	中西 淑子	火を恣うて人の寄りたる十二月	三好 忠士
笛太鼓そろはぬ五人雛御殿	小宮 和代	天平の人のこゑきく枯野かな	名和 永山	新米の幟の揺れて無人市	村下 満
花八手亡き人々に背を押され	金 民子	人影に馴れぬ目高をまた覗く	西島ちはる	近郷より人湧き来たる年の市	村田 浩
地図を手にして一人遍路の風となる	佐々木利正	貴婦人の汽笛のどかや鷗外忌	西島 通人	村人の誰ぞに似をる案山子かな	村橋 克雄
敬老日人それぞれ物語	重富美津恵	くたびれて人丸くなる吾亦紅	西村 英雄	あんぱんを買ふ人の列瀬祭忌	目黒 輝美
雪達磨人の匂ひと日の匂ひ	芝田 太	無人駅風のすきまの祭笛	野島 巧休	亡き人のみなそこにをり冬銀河	森 京子
あの人も彼の人も亡し遠花火	清水 仙里	山越えの一人遍路の鈴の音	藤 文萌	のみの市人混み参道朝の冬	柳原 京子
人形の頭の囿む寒さかな	清水 洋	身動きのならぬ武将や菊人形	浜西 修	人ひとり通れる道の秋の暮	山岸 すす
焚火するたびに人間取り戻す	城	駅を出て人はどの灯へ柿紅葉	林 すみ	金柑を盛りて百円無人駅	山原 一見

神野 紗希 選

特選

土竜また銀河を渡る夢を見る 高知 宮口 和子

詩的感興からは遠そうな土竜が、銀河と配合されて、一気に詩の主役へ躍り出た。どんな夢を見るか、何に憧れるかは、その魂の本質を表す。土中のくらやみに繰り返し銀河を夢見る、土竜の魂の高潔。人間の感知できない世界の片隅で一個の生を輝かせる土竜に、そっと心を寄せた作者の魂の優しさ。

懐炉抱く何も怖くはないと思ふ 埼玉 平井 萌 黎

寒い中、懐炉を抱きしめ、自分に言い聞かせる。「何も怖くはない」……失敗することも、大切な誰かを失うことも、いつか訪れる死も。言葉とは裏腹に、多くの不安が押し寄せる。こんな先の見えない時代なら、なおさら。冷たい風吹く水際で、むき出しの魂が震えているような、切実をはらんだ一句。

……題詠「人」……

風紋や人待てば来る冬の鳥 岡山 小西 瞬 夏

風紋の浜に誰かを待てば、その人の代わりにのように、冬の鳥がやって来た。満たされない心の空白を、少しでも埋める冬の鳥。風紋は、人間の生を超えた時間、はるかな自然の運行を象徴する。上五の「風紋や」で、舞台設定はもちろん、永遠に誰かを待っているような、不思議に静かな心地が展げた。

秀作

探鳥の田に蒲公英の帰り花 滋賀 竹内 恵子
 母の忌やさくら散る道図書館へ 熊本 小西 清香
 せり終へしばかりの甲羅へと翼 愛知 清水 良郎
 切株に赤き新芽や雪解水 神奈川 千原 道子
 猿の腰掛撫でて叩いて獺祭忌 千葉 高木ヤエ子
 草虱つけて来し子を丸裸 愛媛 横田青天子
 母にまだ残る蒲団を蹴る力 東京 伊丹 妙子
 保育器へ母の乳張るクリスマス 広島 青木 遵子
 連合ひは子規の後輩柿熟るる 大阪 重松 厚子
 科学誌の分子模型やぶだう食ぶ 鹿児島 久永のり尾
 戦争画のすみの酒瓶草の花 愛媛 松本 京子
 生真面目な冬の匂ひがしたと言ふ 愛媛 桜井 教人
 姥捨の月下の石を踏み外す 新潟 山之内喜七
 みちのくの地鶏の卵風光る 茨城 北浦 敏子
 遠来の封書冷たし胸に抱く 東京 渡戸 道子
 アトリエの窓は北向き十二月 東京 赤瀬川 恵実
 足湯して俄に重き登山靴 神奈川 加藤 三朗
 教室のひとつに明かり冬隣 愛知 加藤 忠
 松山や湯の香柚子の香子規の文 奈良 辻 肇
 ミカンノハナサクの電報入学す 徳島 阿部千栄子
 ……題詠「人」……

野の末に人語及ばず冬の虹 広島 岡田 康子
 鳥交る人は言葉を渴望す 神奈川 迪方 温容
 除染する人のコンビニでおでん煮え 神奈川 江原 文
 徘徊は人恋ふはじめ夕永し 徳島 神野 喜美
 人間に取り憑きさうな扇風機 大阪 清島 久門

▼佳作▼

掲載は氏名五十音順です。

龍の玉竹鉄砲で飛ばしけり	松島 孝幸	ICU出で来し窓に後の月	岩城 未知	ケーキ店新妻の来て小鳥来て	沖じゅんじ
きつちりと雨ふりほどき曼珠沙華	明石 綾子	運動会果て爆睡の一家族	岩崎とし恵	神留守の電飾の街賑はひて	奥 可津女
熊皮に座して炬話はじめれり	阿久津勝利	冬夕焼開脚橋を船通る	岩本 弘	子規宛の虚子の文読み春惜む	奥野 とみ
怒り持て坊ちゃん列車と凧と	浅香 佳子	ふかし諸割れば唐詩の山そびえ	植 朋子	小魚の小さく光る十二月	小倉貴久江
あご飛んでゐる間に近し軍靴の音	麻生 勝行	榎櫃の実ひとつ落つればバス発車	上田 純子	柿剥くや父の忌近き文机	尾崎千代一
余命幾日見舞ふ日毎の紅芙蓉	阿部 和子	窓拭きに鳶の一声小春空	上田 政年	薬やコーヒーの縁転がる陽	小澤 康喬
くこうくこうと母の寝息の寒夜かな	安部 奈月	百円の日日草の機嫌良し	上ノ山陽子	冬鷗びつしり繋留の鉄鎖	小野 雅子
ホルンの音辿らば水の澄む辺り	阿部 久	みかん剥く早金婚の共白髪	牛島 和代	鱈酒をあいつと飲むと決め焙る	片桐傳一郎
草の根をつつく子鴉秋の水	安楽 陽子	露しとど埴輪は大き口開けて	内田 陽子	しぐるるや大街道の屋根途切れ	加藤 鉦物
算盤の裏に旧姓花八つ手	石川久美子	朝寒に起き上がりゆく熱気球	江口八重子	真つ直ぐの線を書けない冬芒	加藤 隆子
肩の雪かるく払ひて神の前	石丸美代子	カーテンに光あふるる四月かな	榎戸 源茂	「追いつきをします」寒夜のワンルーム	加藤 申女
コップに野菊即席の俳句会	石村 流翠	朝影に蝶の透けゆく岸辺かな	大垣鹿乃子	全開の天の岩戸や春の月	加藤 浩
月明の升 <small>のぼる</small> に縋 <small>きよし</small> る清かな	伊集院洋介	光差す子規の小部屋や秋の蝶	大久保貫太郎	しゅんしゅんと鯨の肺の青みゆく	門田なぎさ
結い直すポニーテールや弓始	磯崎 俊雄	出来た出来たセルフの給油天高し	大島 和海	嬰兒の金魚と同じ口をする	金子 恵美
秋風や沼埋められて駐車場	伊東はるか	水鳥を見し日の夜の羽音かな	大坪 洋子	生き延びし猫抱つこ好き窓の雪	金子日出子
晩稲一枚風が行く雲が行く	市川 薑子	母の日の父のエプロン縦結び	大西 榮子	駄菓子屋の裸電球花吹雪	金子日出子
二杯目のアールグレイに秋深む	伊藤 哲	坊ちゃん列車の車掌靴や秋の空	大沼 遊山	暮れ残る大河の光鳥渡る	加林 悠
風音の高く過ぎゆく晩稲刈	伊藤とし子	細波の松山港の冬紅葉	大沼 遊山	逝きし子は三十六と聞く冬の日	川口 明子
柿喰ふて石手寺さんの鐘を撞く	伊藤 昇	空澄みてわつと泣きたし寒桜	大山みすず	川霧を裂いて小鳥の飛びゆけり	川崎 公隆
湯屋番の鯁髭なり碇屋	井上 遊子	もう小言言はざる菊の柩かな	岡田 邦男	朝靄や野猪と遠き眼を交はす	河崎 直
もてなしの茶漬は瀬戸の桜鯛	井上由美子	春立つや町の真ん中松山城	岡本 戎	雁来紅や舟を売るとか売らぬとか	三泊みなと

鉛雲溶かして冬の斜光かな	川村マチン	湯上りの子の髪匂ふ虫の宿	小中 命子	復興の地やとりどりのチューリップ	四宮 一子
空瓶に露草入れた無人駅	菊政 才子	マネキンの手足長くて春隣	小林 麻子	津波跡砂持ち上げて浜薊	芝 由雄
行間の広き詩集や冬木立	北島 孝子	今朝の空あまねく青く休暇果つ	小林香代子	汽車を待つ長椅子かたし夏の月	柴田 恵象
詰め放題抱えてレジに林檎十	北村 薫	コーヒーと四コマ漫画冬うらら	小屋 幸保	渡船より郵便バイク鱗雲	志磨 泉
円墳を円く包んで草紅葉	木下 恕子	夕映に海鳥揃ふ冬岬	金 民子	秋徽雨鳴子の宿の大こけし	鳥崎多津恵
幼稚園近くて葡萄熟れにけり	木原 登	母に似た雪だるま解け餉の仕度	近藤 精一	ダイブして私のかたちげんげ草	嶋田 奈緒
台風が来るぜと甥のLINEかな	木俣 道子	嘘付きは髪なびかせて冬の星	近藤 幽慶	紅葉狩り優しき顔で帰り来ぬ	白岩 賢次
人參のジュースや本の続き聴く	木村 啓子	一本の轍のひかり雪の原	近藤 英明	揉み合ひて紺深まりぬ冬の波	菅原キタノ
冬うらら鯉がゆらりと橋くぐる	木村 良昭	冬至湯や星の形の蒙古斑	クラド坂の上 権守いくを	神の留守巫女の口紅濃かりけり	杉江 茂義
白い歯ときれいな眉がプールから	清島 久門	冬籠りせぬ山彦と二人ぼっち	三枝 青雲	農に生き兵と死したる父の盆	杉田 英次
小春日くるるん一六タルトかな	清島 久門	すぐ来いは子規の台詞や雪深深	坂 一草	観覧車見上げる頬に冬の雨	杉本 美恵
象の耳ばたんと閉づる赤き月	久下沼 篤	まるめるの匂ふ文机稿を練る	榊原 博子	鈴懸けの瘤荒荒と冬日燦	須崎咲久子
さざなみや大鷲に鳶つきまとい	草野 准子	樹木希林色なき風となりて逝く	坂口 智弘	芋を食ふ我が晩学の唯物論	須崎 輝男
寝不足の目に鶏頭のまくれなひ	楠部 天思	波の音立て選り分くる小豆かな	笹内かた梨	スヌードに籠もる「おはようございます」	迪方 温啓
告白や冬の 大三角の中	楠部 天思	居酒屋に信楽狸蚊遣豚	阿見 果凛	飢える国余す国あり豊の秋	鈴木 計廣
深雪野や汽車の行く手にある夜明け	楠部 天思	城址の風にはづめり八重桜	佐藤 久代	寒牡丹絹地に描く老絵描き	鈴木 健一
夕星に誘われ妻のあっぱっぱ	郡司 紀子	連れ立ちて春の道後の一番湯	佐藤 美保	主治医より外出の許可日記買ふ	鈴木 武
真ん中に松山城の良夜かな	剣持 紀夫	夏帽子声とどかねば振るばかり	澤井 政夫	山の子のひよいと顔出す手に通草	諏訪美和子
つま先で木枯を蹴る帰り道	古賀 ゆき	校長の持つちり取にいちようの実	参鍋とし子	ほの青く早春の森息吹くかな	関 雅己
ニューヨークより孫の来し秋日和	小坂たま子	漱石忌猫眠りある古本屋	塩川 隆三	見なれたるどの庭木にも夏来たる	曾我部志寿恵
通勤に兜太よむ日のいわしぐも	越野 藤子	初恋は国語の教師文化の日	重富美津恵	桜木を母のごとくに油蟬	曾我部剛生
石鏡山の朝日遍し稲の露	兎玉 千鶴	義理堅き彼よりとどく伊予蜜柑	泉 耿介	柿赤し兄の眠れる伊予遠し	高木ヤエ子
受話器よりすず虫の声故郷の	小塚 信江			団栗に大木となる志	高崎 雅明

商談へ鮎の割り込むカウンター	高須賀あねこ	甘藍剥ぐはるかより声おもひ出す	富永さつき	前撮りの二人の背に伊予簾	野呂 天風
畦にあふ小春の蝶の知らん顔	高瀬 竟二	手袋を外す間もなく抱かれけり	友田 哲郎	弟にまづは供へし木の実独楽	萩原 豊彦
黄落の出口ひかりと波の音	高瀬 瑞憲	渦潮の渦が渦追ふ今朝の秋	中里 芳夫	嶺々の尖り出したる師走かな	服部きみ子
越後よりどすんと届く今年米	高橋 和湖	木蓮の散るを踏みゆく猫の午後	中島 弘人	唐胡麻や飛行機のとぶ夢を見る	濱田イサオ
常のごと城に月あり赤子泣く	高松 一港	貫ひ湯に行く疎開児の良夜かな	中根 武郎	牛生まるミルクのやうな霧の小屋	浜西 修
星ひとつ生まれて芒原さわぐ	滝浪 武	台風や猫うずくまり貌尖る	永野 春子	ラジオ鳴る浜日傘越え風強し	林 博史
重力に抗ひ冬の信天翁	詫間 洋志	鯛素麵食ひたし松山城高し	中村 重義	たわわとは秋の言葉ぞたわわなる	早瀬 裕昭
縞馬の冬日へ揃へ縞の尻	武市 宣子	シヤツの染みは君が涙ぞ月冴ゆる	中村 未央	秒針は律儀に動きりんご剥く	原口すま子
浜風や月が弔う蜥蜴の尾	武田 和恵	美しき尼のくださる糸瓜水	名越 順子	敬老日金色夜叉の紙芝居	原田かつ子
水底のやうな図書室冬日入る	竹中 昭子	風呂吹や漱石もいて子規もいる	夏目 重美	僕はいま悩んでゐます鴟笑ふ	東岡 千佳
到来の舞茸稚の頭ほど	竹縄 征子	雪道を背負ひくれたる兄逝けり	夏目 惇子	手旗振る少年がゐるた夏の海	久田 正己
蕪洗ふ母の乳房が恋しくて	竹本 桂子	草原の芒シンブル・イズ・ベスト	奈良 弘	水の上歩いて渡りたい月夜	菱沼多美子
寒雀散りてあらはる菊瓦	田中 公子	黄落やコンパス置きし地図の上	成瀬 貢	菜の花やはぐれて泣きて星一つ	ひでやん
夕焼けに並ぶ風車や佐田岬	田中 左海	美しき数式一つ鳥渡る	新野美佐子	教会の福音墨書麦の秋	平尾美智男
海鳴りの岬に熟れる蘇鉄の実	多良間典男	マリローランサンの女ら春の帽子かな	西野 敏子	ふと見せる意地の強さや青蜜柑	平田 袖月
占師に耳誉めらるる花の下	千原 道子	枯芒雨にひかりをとよりもどす	西原 みどり	松山の空の一碧冬に入る	藤岡 定子
隠沼のさびしさを鴨埋め尽くし	塚田佳都子	菊香る玄関に置く回覧板	西原 雄三	長靴の引つ掛りをり崩れ築	藤田 信義
寒灯や砂糖の残る紹興酒	土屋 幸代	隙間より沼の光を冬木道	西村 英雄	搾乳の牛も農夫も息白し	藤林 正則
秋暁や鏡のやうな潮だまり	土屋 幸代	黄金虫平らに光る轍かな	額田 昌安	をさな掌のまはす地球儀春隣	藤村 義治
リュックから干梅二つ八合目	土居 直子	落日の花石路の黄は昏れぬ色	布野 幸子	われに父やさしかりしよ亥の子餅	藤原 和子
早天の病室の窓小鳥来る	土井美恵子	小包や萬萱に湿りし母の文	能田 孝昌	遠花火記憶に色のなかりけり	堀 昭治
腕いっぱい小菊抱へて逢ひに行く	常盤 さち	駅弁を買ひ銘菓買ひ旅小春	野間 泰子	冬至粥炊いてくれたる娘婿	堀岡 英子
山の端に雲の集まる冬はじめ	徳見 淳子	見習ひの二代目茶髪ししやも焼く	乗松 明美	かの子忌や机の奥に赤絵の具	前島 康樹

火の色の柿をたわわに陶の里	増田 宇一	紅茶よりコーヒーが好き雪の街	森岡 滋夫	銀杏の匂い薄暮の杜を行く	若林 敬子
呉服屋に寄れば焙じ茶秋夕焼	松岡久美子	一人良し多勢なほ良しおでん酒	森下壽々枝	少年の小暗き自我や花イバラ	渡辺 妃恵
船絵馬の海は紺碧石露の花	松本 京子	ソーダ水元素記号のパスワード	森山 健一	風涼し賽の河原のたけとんぼ	渡辺たかこ
地球儀にほこりキラキラ原爆忌	松本ちずる	消しゴムのまあるくなって冬籠り	柳沼 好子	かき氷くづしてみくじ読み返す	渡部 秀美
死ぬるとは翼貫ふこと春の夢	松本 信子	高層に独りの詩人春満月	山口 楓子	……………題詠「人」……………	
夕星や子蝙蝠の迷ひ出で	水谷 洋子	踏み鳴らす三鬼の郷の霜柱	山口かずお	「考える人」の案山子を見てみたい	麻生 勝行
光陰は戻るを知らず冬銀河	峰崎 成規	枯蟻螂掌にある軽さかな	山崎 文恵	人見知する兎にえくぼ初節句	館矢キツ子
飛行雲冬のプールに南京錠	三橋 順子	転校を諾ひし子と梅の道	山田 綾子	人日の校長室の明りかな	荒尾るみ子
我先に寄り来る鯉や春近し	味村 京子	週刊誌を扇子代りに駅薄暑	山野 節子	若人の夢は船長島は春	有田 耕三
「むささびがいます」と札の巣箱かな	宮坂美恵子	一日に一客の宿枇杷咲けり	山本あかね	腰据えて値切る人ゐる師走市	粟村 勝美
楸の柄で野球した日や赤とんぼ	宮崎 尚範	一村の疲れの見ゆるからすうり	山本 則男	先に来て手をふる二人紅葉茶屋	安在 宗風
腹這うて書を読む子規の忌なりけり	宮野しゆん	白壁に冬夕焼けのありつたけ	山本 久枝	冬隣道路標 識直す人	石井 弓子
海底は真珠を吾は月を抱く	宮本 幸子	囀や板書を残し閉校す	山本 陽子	小春日や人疑はぬ自動ドア	石川久美子
百歳の頼りは姪御伊予小春	明神マサコ	キツチンの棚に指輪や大西日	山本 礼子	はらからの九人育ちし黴の家	稲井 夏炬
天明の噴石黒し冬菫	武藤 洋一	薫風や木の卓に鈴まろびをり	山下 純子	安曇野の海人の將軍鬼胡桃	井上 宣孝
登高や点心茶屋の力餅	村上 重夫	神無月荒鋤きすみし田の白く	横山ツヤ子	綿菓子へ並ぶ二人や文化の日	上田 純子
満願の遍路鯛飯所望せり	村田 浩	まだこぬか帰省子よもう帰るのか	吉井 功	柿熟し人を失うことを知る	内山えいじ
改札を抜けてすぐ海青蜜柑	村田 寛文	三津浜の鰯の佃煮いらんかな	吉田 春代	花形に切り人參を喜こばす	大内田芳乃
飛び来たるやうに一輪帰り花	村橋 克雄	藍色にしずもる湖北冬めきぬ	吉原 誠之	イスはみな桜に向いて無人駅	岡田 邦男
県境はトンネルの中冬に入る	妻鳥 弘子	大松の瘤の太さや冬来る	吉見シナヨ	猫の子のさみしいときは人舐める	岡田 春人
水引草の紅を手練れば暗き森	百田登起枝	霊山の湯小屋に祓ふ春の泥	吉本由紀子	対岸の人へ大声御慶述べ	尾崎 妙子
鉛筆を削るにほひや冬の昼	森 瑞穂	フルートの音色と春の風の色	立志	人形も娘も還暦桃の花	小田富美子
冬の詩を書くボールペンどれがよい	森 祐司	風花よ崩れたる山いつ覆う	若下恵美子	書肆深く古書捲る人秋ともし	片桐傳一郎

人參に生産者名兔の絵も	加藤 鈺物	思ひ出を消されゆく人風の秋	関 雅己	手をつなぐ青年二人爽やかに	原 かつ代
冬うらら少し薄荷の匂ふ人	加藤 隆子	人生の匂でありたし今日の月	曾根新五郎	人の日といふ日をテレビ見て一人	風街ゆう子
馬の眼濡れる人為受精や夏深し	じやすみん	手を振りて待ち居る人よ東風強し	高木久美子	人ひとり死んで桜へ小さき風	八神てんきゅう
きりん・人頸椎七個汗ぬぐふ	加藤ヨシ子	見合つては石鹼玉吹く二人かな	高木ヤエ子	寒椿人差指の膿を抜く	比田うに子
人を待つ人に瞬く聖樹の灯	金子 照	満月や子が寝て妻が寝て一人	高瀬 瑞憲	人拒み冬木は天にひかり合ふ	伏木 ケイ
旅人は土佐の訛や鯨塚	川田 潔	魯山人ししゃも盛るにはあまりにも	高橋 洋子	風灼くるサーカスに火をほどく人	古瀬まさあき
台風の目に居て一人将棋指す	川村 朋子	人恋て夕の漁港の百合鷗	高見 恒雄	人日の鶏舎軍手のひとかさね	古殿 七草
暑さ去り靴音高く人の群	北村はるみ	人日や俎板の疵日に晒す	滝浪 武	人日の鶏舎軍手のひとかさね	古殿 七草
人よりも桜長生き花は葉に	木原 登	なんやしらん人が恋しい糸瓜かな	竹中 昭子	ボート乗るクラスメートの二人づつ	松田 紀子
過ぎし日を詩人にもなれずどぶろく	清島 久門	嘘言わぬ人が狐火語り出す	田中 俊	泥被る稲刈る人の草刈機	万波 照世
理科室の人体模型とヒアシンス	国代 鶏侍	臨月の人降りる駅秋うらら	田村 清美	たてがみも人も木立もおぼろかな	宮口 和子
楽人らの旅の終りの良夜かな	明田句仁子	院長の夫人に大根貫いけり	田村 利宣	日当りしベンチに正座小春人	三宅 昌子
人間でなくて良かった日向ぼこ	久保田由紀子	辣菫のひとつ転がる老人の家	茶谷 一花	コーヒーを淹れて二人のクリスマス	村橋 克雄
虫の音が綺麗ですねと恋の人	小畑 定弘	山茶花や三人称で書く日記	津田 京子	縄文杉や人類の春なかば	室 達朗
灯台の見ゆる一間に雛人形	木幡 嘉子	来し方を忘れ野菊を愛づる人	出島 達子	あんばんを買ふ人の列獺祭忌	目黒 輝美
通草持ち病室のぞく人のあり	近藤ひろし	耳が好き人參パンの焼きあがる	富樫 桂子	人類の跡かた探す寒鴉	百田登起枝
荒星や天守の底の人柱	クラド坂の上	秋高し子規生誕地一人旅	富重 善郎	忘年のマイクに一人二分づつ	森 早和世
柚人の斧で柿むく昼下り	佐藤 孝志	人恋ふる山羊の鳴きこゑ冬うらら	中山 幸子	蜜柑咲く波郷草田男伊予の人	森下壽々枝
菜の花の丘に人影雲の影	佐藤 正博	幼子に人見知りされ小雪舞う	那須 伸子	人日の運転席に子の写真	森本 樹朋
びわのはな記憶の底の人々は	下和田真知子	人影に馴れぬ目高をまた覗く	西島ちはる	お一人さま詰めて貰うておでん酒	山内 茉莉
秋澄むや牧人の笛ひびきををり	杉木多美子	二人乗りリフトの下のつつじかな	能田 孝昌	家苞を炬燵に摘む二人かな	山田 治男
ボール蹴る一人遊びの夕桜	鈴木 正子	純白のマスクの人の高き鼻	濃添 恵紀	金柑を盛りて百円無人駅	山原 一晃
正面に富嶽を据ゑて枯野人	角 達朗	老人の沖を見てをり石路の花	林 滋	渡船待つ喪服の五人羸ぐもり	山本 礼子
				オリオンよりまかりこす人火のほひ	有田けいこ

夏井いつき 選

特選

ふかし諸割れば唐詩の山そびえ

埼玉植

朋子

熱々のふかし諸を手にする。あっちこっちと両手で割る。割ってみると、どこかで見たことのある形ではないか、と思う。お、これは唐詩に詠まれている深山幽谷の形だ！ 見立ての句としての意外性は元より、俳味と格調を併せもった味わいの一句。楽しませてくれるではないか。

咲くために宵は椿のお葬式

愛媛

八神てんきゅう

「椿」は「落ちる」ために「咲く」のかもしれない。明日にはとうとう咲きそうな「椿」のために、今宵は「お葬式」をしてやろう。生まれたものは咲き、咲いたものは朽ちる。椿も人も落ちて朽ちることを受け入れて「咲く」のだと知る。美しい春の「宵」だ。

……題詠「人」……

辣蕪のひとつ転がる老人の家

石川

茶谷 一花

辣蕪のひとつが転がっている。それだけの光景だが、下五に「老人の家」が出現したとたん、全ての細部が脳内に再生されていく。何度つまんでも箸から落ちる辣蕪。落としたことを忘れる老人。年寄りの臭いのする家。描かれる老いの現実が、季語「辣蕪」と共に生々しく臭う。

秀作

点滴のドレミソラシド薔薇匂ふ
野路菊の波太陽に洗はれて
狛犬の追つて来さうな木下閣
肩の雪かるく払ひて神の前
群青の空欲る櫓を駆り通す
天明の噴石黒し冬董
夕星に誘われ妻のあっぱっぱ
かたぶくはたんぼぼの茎また地軸
なまはげがテレビ観てる控室
うまへのひとつは騙す文化の日
浜風や月が弔う蜥蜴の尾
自動ドア開く花びら先に入る
うららかを豊に転ぶとはとほほ
回診は一時春眠の浮き沈み
裸木は夕日があれば生きられる
国東の鬼は格別神の留守
煤逃げに妻が指図の追手来る
木の声を聞きし鋏を研いで冬
月の出の汽水揉みあふ盛夏かな
母にまだ残る蒲団を蹴る力

……題詠「人」……

なんやしらん人が恋しい糸瓜かな
靴作る小人のごとき夜業かな
たてがみも人も木立もおぼろかな
神無月駅に一人の相撲取
チヨッパーへ人參シユレットターへ通帳

京都 橋本 光乃
兵庫 岸川 佐江
東京 佐藤 久代
愛媛 石丸美代子
埼玉 谷口 哲己
群馬 武藤 洋一
栃木 郡司 紀子
神奈川 百田登起枝
東京 山内 健治
愛媛 桜井 教人
愛媛 武田 和恵
北海道 松浦 勝
北野 上村扶佐子
愛媛 佐藤 正博
長野 平井 萌黎
埼玉 高田 英子
大分 岸下 庄二
兵庫 小崎 淳子
石川 飯山 昭
茨城 伊丹 妙子
東京 塚本 治彦
石川 竹中 昭子
神奈川 塚本 治彦
高知 宮口 和子
東京 小杉 健一
愛媛 高須賀あねこ

▼佳作▼ 掲載は氏名五十音順です。

空の月川面の月に出会ふ橋	青木 孝子	ヘルメット脱ぎ雪吊を終へにけり	石田香緒子	綿虫を触るその日に引退す	梅田 昌孝
青芝の地球にしぼし空寝入り	青木 孝子	あの山の裾まで干潟海おぼろ	石松 禎佑	法螺貝のひびき返して山眠る	衛藤 知香
ゆりかごを風に頂ける夏座敷	赤繁 忠弘	たつぷりの酒で煮る魚春惜しむ	磯崎ゆきこ	昭和の日カナの名多き死亡欄	及川 永心
素振り音の初日にふれて光るなり	秋山 博明	長き髪いつぼん拾ふ春の部屋	板柿せつか	光差す子規の小部屋や秋の蝶	大久保貫太郎
熊皮に座して炬話はじまれり	阿久津勝利	動かざる芋虫風にみつかりぬ	市川 臺子	茫茫と富士に網打ついわし雲	大島 国康
天地人葱一本の一行詩	浅山美津子	晩稲一枚風が行く雲が行く	市川 臺子	店頭に並ぶ椎茸陶器市	大坪 洋子
啄木の詩集に汚れ夕紅葉	麻生 勝行	夕焼や太郎次郎は峠の名	伊藤恵美子	母の日の父のエプロン縦結び	大西 榮子
この木は太郎この木は次郎けらつき	安部 奈月	園寒し海驢卑しき声で鳴く	稲井 夏炉	さくら貝妻に可憐な訛あり	大西 一騎
ホルンの音辿らば水の澄む辺り	阿部 久	一合の米研ぐ遠き祭笛	稲岡 幸子	老いらくの恋歌を詠み涼新た	大沼 遊魚
己が影見ている猫や神無月	荒井 伸子	ぎんなんを踏んで防災訓練日	井上由美子	稲稔り村はゆつくり重くなり	岡田 邦男
くさめしてもとの美貌にもどりけり	有澤 嘉晃	碧落や日々に影欠く木守柿	今井喜久江	冬の坂卒倒したる影引いて	岡田 政信
運ばるる湯葉や豆腐や時雨けり	粟村 勝美	寄鍋や聞こえるように一人言	山崎 点眼	海おぼろ旅のいづこも郷に似て	岡田 康子
全身の体毛吹かれつつ昼寝	飯塚 柚花	チャルメラの尻音寒の月が曳く	今田 幸正	黒揚羽蕊の奥へと憚らず	大場 佳代
風邪もらふ異国のやうな東京に	山内 雪	祝詞聞くかに糞虫の顔覗く	岩水ひとみ	紅葉狩魔法瓶より酒を注ぎ	奥 可津女
祖母と唱ふ九九の暗記や秋高し	池谷 硬司	菜の花や両手に余る水平線	岩本 信正	鶏頭の黒き種吐く散歩道	奥中 和子
反芻に色を失ふ蓮華かな	池田 純子	初雪を告げる車掌のアナウンス	植 朋子	生真面目な冬の匂ひがしたと言ふ	桜井 教人
落し紙摺み亀虫つかみけり	池原 豊治	案山子だと思ふ一つが歩き出す	植木 修子	一畳の莫塵に商ふ市小春	奥村真由美
木の実降る阿吽の像の踝へ	石川 明	跪く驟雨の中の竜胆に	上前 永子	新米の二粒三粒青かりし	小田桐耕雲
子を生きぬ子の引き寄せる烏瓜	石川 明	露草の金の睫に逢ひにけり	植松 節子	上流に一揆の村や曼珠沙華	尾堤 輝義
はじめての重湯ひとさじ小鳥来る	石川 春兔	ホームページを御覧下さいりんご剝く	内海 恵子	カープ勝つたりさるすべり真つ盛り	小野 臥牛
顎のせて眼科の椅子の秋の冷	石川 春兔	駅の名は茂吉館前柿照りぬ	宇野みさ子	退院のポインセチアは痛すぎる	こぼれ花

薫り立つオオオニバスの初夜のこと	こぼれ花	赤い羽根いつまでつけていいものか	清島 久門	しんしんと奥歯の疼く虫の闇	坂本 徹
菊 贈 百三歳の誕生日	加地 晴代	夏帽子脱いできれいな眉となる	清島 久門	ロボットと交はず挨拶冬隣	酒谷 貞子
十二月猫のとろんとする重さ	加藤 隆子	赤い羽根似合ふスーツを着て出社	清島 久門	立冬や押ピン三つ補へり	鷺山 珀眉
「追い焚きをします」寒夜のワンルーム	加藤 申女	散る火花咲く火花とも生臭し	清島 久門	ともだちのわらいうつつてはるのにじ	阿見 果凜
しゅんしゅんと鯨の肺の青みゆく	門田なぎさ	医務室に終はらぬ夏と松葉杖	清島 久門	密かごとばれる川原の芋煮会	佐藤いく子
蒼穹を絞り込みたる鷹柱	金子 恵美	振り返る鹿にきれいな眉ふたつ	清島 久門	青竹踏むたつぷりと踏む翁の忌	佐野いつ子
剥き牡蠣の初めて触るる真水かな	神根 信	台風や長針短針ともに遅遅	清島 久門	小春日や遊具修理の鉄の音	佐野 月子
十月の裸日和に躍りけり	川井田ヨシ	象の耳ばたんと閉づる赤き月	清島 久門	夏帽子声とどかねば振るばかり	澤井 政夫
朝靄や野猪と遠き眼を交はず	河鱒 直	告白や冬の大三角の中	柳部 天思	校長の持つちり取にいちょうの実	参鍋とし子
いい風ねそうね桜も咲く頃ね	河村 章	冴ゆる夜や手鏡にある指の跡	忽那 早苗	水鉄砲母のお臍を狙い打つ	繁定 操陽
母いつも何か煮ている日永かな	菊池ただのり	王妃の遺品よ雨上がりの蜘蛛の罟よ	工藤 晴美	連合ひは子規の後輩柿熟るる	重松 厚子
影もろとも水に折れたる枯蓮	岸田 尚美	夏来る川と野球のある町に	国代 鶏侍	東海道五十三次花吹雪	篠原 枕流
黒楽の銘は古狐赤のまま	岸本眞智子	小春日の手のひらに乗る戦闘機	久野眞喜恵	帰り花逝く身支度の抄らず	島崎多津恵
新蕎麦や喪服でくぐる縄暖簾	岸本眞智子	羊水の傾き月に誘われ	久保 年生	電気屋の看板降ろし街薄暑	島津 義浩
みちのくの地鶏の卵風光る	北浦 敏子	堅炭を掻き出すほのほ欺かず	小池 成功	落蟬の生国いずくとも知れず	清水 仙里
敗荷や月光水片の如落つる	北浦 敏子	屠蘇の座に曾孫寝返り打ちにけり	甲村サカエ	箸立ての箸も四角に秋徹入	清水 洋
薄水や朝日に研がれつつ崩る	北浦 敏子	一本の茎大輪の菊を盛る	小堺 政彦	手の機嫌水の機嫌や紙を漉く	下村たつゑ
縄張りの尿鮮やかや雪野原	木下 薫	母の忌やさくら散る道図書館へ	小西 清香	初霜のかがやきの中不登校	白井 正枝
幼稚園近くて葡萄熟れにけり	木原 登	秋の波ねむりにおちるとき息	小西 瞬夏	揉み合ひて紺深まりぬ冬の波	菅原キタノ
ままごとの言葉は死語にあかまなま	君塚 郁子	セーターを脱げばひとつのがらんど	小林 麻子	ががんばや兎の歯一本抜けており	須佐はじむ
二ん月のたたみて薄き母の膝	木村たけま	花魁の唇小さき真弓の実	小松 清	芋を食ふ我が晩学の唯物論	須崎 輝男
風花や扇びらきに蜻干して	木村たけま	さつきまで河童が居たと櫓の宿	金野 秀次	数へ日のふくらんでくる商店街	関口 ミツ
小春日をくるるん一六タルトかな	清島 久門	家出したと子には伝へし金魚の死	柳原 博子	ドイツ積みみの赤煉瓦館冬に入る	瀬野 浩

命名の墨の匂ふや白椿	高木 昭子	暗渠出て春水らしくなりにけり	塚本 治彦	小鳥来る今日は玻璃戸を拭く日和	羽立 和子
柿赤し兄の眠れる伊予遠し	高木ヤエ子	寒灯や砂糖の残る紹興酒	土屋 幸代	毒瓶に忘れられたる足いつぽん	羽藤 武彦
団栗に大木となる志	高崎 雅明	いづこから小鳥来てゐる犬の墓	寺田ともこ	媼皆笑ひ上戸や桃の花	濱田真知子
商談へ鯨の割り込むカウンター	高須賀あねこ	つはぶきの黄に形容詞など要らぬ	藤堂くにを	たわわとは秋の言葉ぞたわわなる	早瀬 裕昭
秋高し万の果実に万の手間	高須賀あねこ	ぞなもしの流行りし学舎春なりけり	徳田しずよ	散紅葉踏まれても踏まれても赤	原 清香
寒紅やルビふるやうに母とゐて	高橋 洋子	渦潮の渦が渦追ふ今朝の秋	中里 芳夫	大空の腹をくすぐる入道雲	原 清香
常のごと城に月あり赤子泣く	高松 一港	裏富士の闇かぶさりて吊し柿	永島 文江	草じらみ服のほつれに遊びたる	原 美知子
しばてんは河童の友ぞ遠花火	高松 一港	冬耕す北島三郎聴きながら	中野しずこ	草笛の鳴らぬ不思議に尖る口	原 美知子
星ひとつ生まれて芒原さわぐ	滝浪 武	雨止みの灯に灯に桜紅葉かな	中村 孝行	僕はいま悩んでゐます鴟笑ふ	東岡 千佳
引き算の引き尽したる枯木立	詫間 洋志	落葉焚き話す相手に尻向けて	中村 智善	真つ新の禪ひとつ井戸浚ふ	久永のり尾
一合の米を研ぐ手は夕焼けて	武井 猛	美しき尼のくださる糸瓜水	名越 順子	懐炉抱く何も怖くはないと思ふ	平井 萌黎
風邪の子の父の手にある母子手帳	竹内はるか	仏面して煩惱の日向ぼこ	奈良 弘	教会の福音墨書麦の秋	平尾美智男
茹で栗や虫ゆでらること知らず	竹内 葉子	美しき数式一つ鳥渡る	新野美佐子	半島の先の先まで大根引く	平尾美智男
夕端居瘡蓋の痕かゆきこと	伊達 文葉	草笛で少しこの世を膨らます	西川 草笛	大根の切断面や墓仕舞	福井 宏郷
まれびとや柿のあかるさ供へけり	谷 俊和	さかしまの塔の佳きかな水の秋	西川 順子	天辺に墓石の座る蜜柑山	福田 優子
煮凝りや日本海を取りくずす	谷口 一好	餅撒きの餅貫ひたる道後かな	西田たかこ	歯車の大中小と日脚伸ぶ	八神てんきゅう
日短し脳と手足の時差長し	黍野 恵	つまづきてつゆ草の青すぐそこに	西館 紀子	秋の朝めざめぬ人の髭を剃る	比田うに子
染み深き花魁の椅子みどりの夜	たむら 葉	枯芒雨にひかりをとるもどす	西原みどり	曼珠沙華綺麗にのこる喉仏	比田うに子
さわやかな目覚めだきと何かある	多良間典男	問診に嘘少しつき暮の秋	日光 正春	腑に落ちて真つ直ぐ立ちぬ水中花	藤崎由希子
お接待ぼんとラムネの音を受け	段田 晶雄	あをあをと藻草の泳ぐ秋の水	二藤 覺	われに父やさしかりしよ亥の子餅	藤原 和子
占師に耳誉めらるる花の下	千原 道子	小包や萬草に湿りし母の文	能田 孝昌	暮の恋済みし貼り紙門跡寺	伏木 ケイ
息吸つて吐いて幸せ鯛雲	茶谷 一花	連隊の跡地にはかに麦芽生ゆ	信澤智恵子	枯蟪螂明治男の貌したる	測野 栄子
直ぐ忘るる今日の運勢日向ぼこ	塚原味紀枝	げらげらと笑ひて止まる木の実独楽	萩原 豊彦	ベチカ燃ゆ絹のドレスの音の中	古市やすこ

本館より通り見ている子規忌かな	古川 照子	四国まで見ゆる高きに登りけり	村橋 克雄	風鈴の赤児起こさぬやうに鳴り	渡辺 国夫
村芝居二の腕太き娘役	細田 佳道	トンネル工事松茸山をくすぐって	百瀬 明子	本日は晴天こほろぎが跳んだ	渡辺 照子
指揮棒のはばたきをりし初紅葉	細野やすい	鉛筆を削るにほひや冬の昼	森 瑞穂	引き算のはじまる紅葉ゆる綺麗	渡辺 照子
細月の刃先の濡れて夜の秋	町田 典子	名城巡り名湯巡り冬に入る	森 道隆	……………題詠「人」……………	
林檎剥く円周率の果てしなき	松井 治美	我が畑の柿より甘き柿貰ふ	森 安千代	「考える人」の案山子を見てみたい	麻生 勝行
四国すみれ昔もをみな弱からず	松井 洋子	冬の詩を書くポールペンどれがよい	森 祐司	人体といふ水時計冬に入る	あまの樹懶
目の合ひてくちなは道を譲らざる	松井 洋子	黄落の音の中なる閉館日	森原 陽子	麦とろろ人生すでに後半戦	粟屋紀佐子
あらぬ方へ首振る駅の扇風機	松井 洋子	囀りを真似つ凝視のカメラマン	守安 雄介	一人子の男の子羽子板持ちちてをり	池田タマキ
体液の青き地球や鳥渡る	松浦加寿子	消しゴムのまあるくなって冬籠り	柳沼 好子	小春日や人疑はぬ自動ドア	石川久美子
地球儀にほこりキラキラ原爆忌	松本ちずる	手負ひ猪犬一匹を殺しけり	山内 茉莉	人波を逆らふしつば暮雪かな	伊藤 米子
三度目に点くライターや冬に入る	松本 悦昭	袖口の白墨汚れ冬に入る	山内 茉莉	老人と話す老犬新樹晴	稲葉 秀子
初霜や金平糖の尖る音	みい	飼主もつられて止まる草紅葉	山岸 嘉春	冬茜会わせたい人できました	植 朋子
マフラーに溺るる恋の話して	みい	胎内に玉もつ秘仏冴返る	山口 あき	柿熟し人を失うことを知る	内山えいじ
のぞかれる無人海女小屋鰯雲	三木 甲一	花ミモザ法王様の恋の文	山口 楓子	人として水買う僧や夏衣	宇乃美津子
柘咲く村一難しき家の	溝渕 淑	高層に独りの詩人春満月	山口 楓子	人參の人參色になる秘密	梅田 昌孝
土竜また銀河を渡る夢を見る	宮口 和子	落椿道後のお湯に浮かべたり	山 すみれ	霞にぞ吸はれし飛球追ふ四人	遠藤 玲奈
坊ちやんのバツタと思ふ城下かな	宮野しゆん	姥捨の月下の石を踏み外す	山之内喜七	菌狩地元の人に見てもらふ	小川美津子
夕立は姉の唄つたドロップス	ヒカリゴケ	キツチンの棚に指輪や大西日	山本 礼子	人生で最初の眼鏡冬隣	子安 桃子
親指の骨だけ鳴らぬ鳳仙花	宮本 幸子	冬のばらさびしさは今天辺に	行藤 郁代	真つ先に落人の谷時雨れけり	荻野 邦子
海底は真珠を吾は月を抱く	宮本 幸子	草虱つけて来し子を丸裸	横田青天子	人形も娘も還暦桃の花	小田富美子
大空に曲り角なし雁の棹	村井みさを	安曇野の夜明けは寒し水の音	吉野 正一	噴水や大道芸に人まばら	加藤 三朗
海風と緑のあはひペダル漕ぐ	村上 美恵	いwashいwashいしゆびでひらけば海の銀	有田けいこ	きりん・人頸椎七個汗ぬぐふ	加藤ヨシ子
満願の遍路鯛飯所望せり	村田 浩	風に絵をかく秋のこどもにあいました	有田けいこ	人日や万年床の敷き始め	愛しみの ペラドンナ

旅人は土佐の訛や鯨塚	川田 潔	人日の義齒よく洗ふ夜伽かな	須田亜希子	風灼くるサーカスに火をほどく人	古瀬まさあき
台風の目に居て一人将棋指す	川村 朋子	一人居の勝手に作る夏休	諏訪美和子	子の決めし人の朗らか石路日和	松井 洋子
長き夜や棚に戻さぬ偉人伝	北川 溪舟	子規庵の闇汁に人寄合ぬ	田口 穂心	星飛んで時差9時間の人の声	水谷 洋子
月下美人三つふみしよりの日々	木村たけま	鷹柱立ち人好きな叔父逝きぬ	竹内 恵子	人の死に男焚火を囲みけり	溝渕 淑
人日の離れに知らぬ女客	木村たけま	嘘言わぬ人が狐火語り出す	田中 俊	母に読む天声人語寒明くる	宮崎 清美
萩を掃く箒が二本人二人	清島 久門	仙人掌咲くひきこもりの子が笑う	黍野 恵	他人のかほ色なき風に欲しくなる	ヒカリゴケ
颱風と出遇ふ外人墓地である	清島 久門	虹消えて猫と二人に戻りたる	田村 昶三	フィアンセは八人兄弟天高し	向井 昭子
台風や母郷の端に異人墓	清島 久門	院長の夫人に大根貰いけり	田村 利宣	噂とは思へぬ噓二人して	椋本 望生
牛馬に紛れ一人はヒトにまた粟に	清島 久門	山茶花や三人称で書く日記	津田 京子	冬の霽晴れて柩と一人かな	村田 淑子
人間に飽きるとすれば泥鰯鍋	清島 久門	産みの親廣瀬直人と梅の花	内藤 研象	縄文杉や人類の春なかば	室 達朗
楽人らの旅の終りの良夜かな	明田旬仁子	石路の道猪を通して人こぼむ	永田タエ子	忘年のマイクに一人二分づつ	森 早和世
旅人の着物姿や春の宵	久保田敏子	全員と言へども二人初鱈	中根 武郎	胡麻つぶは耕人等らし湖の風	森原 陽子
人間でなくて良かった日向ぼこ	久保田由紀子	冬帽子目深にありて人違い	那須 伸子	人ひとり通れる道の秋の暮	山岸 すす
よく笑ふ人を真中に初写真	蔵 堯子	身に入むや人みな吾を研ぐ砥石	奈良 弘	竹婦人夫の触れしほどの辺り	山口美由喜
サンドレス膝に人体解剖図	小池 博美	人影に馴れぬ目高をまた覗く	西島ちはる	露けしや昭和の人と呼ばれ初め	山田 綾子
細雪真夜の人魚の足湯かな	児玉リツ子	稲を刈る弥生人より百代目	萩原 豊彦	おほかたは一人来る墓蛇の衣	湯浅 敬子
風紋や人待てば来る冬の鳥	小西 瞬夏	麦蒔くや無人踏切たまに鳴る	橋本 久子	民宿の主人女形や村歌舞伎	湯田 暁道
海人のタトゥー隆々雲の峰	貞住 昌彦	踊る輪や故人十八番のくどき歌	羽廣 竹夫	カルデラに人住む不思議冬銀河	吉原利津子
初雪や前人未踏の通学路	貞住 昌彦	福笹の揺れて駄洒落のやうな人	毘舍利道弘		
紅葉散るやうに逝けないのよ人は	佐藤 志乃	人型のロボットの手の悴めり	平井 萌黎		
間引き菜を盗人めけるつまみやう	里見かつこ	天高し人柱の碑拓本す	福井 宏郷		
人妻を攫ひ逃げるや運動会	志村 美好	人ひとり死んで桜へ小さき風	八神てんきゅう		
老人と老人がいて草紅葉	須佐はじむ	老人会球ころがして明日生きる	藤原キヨ子		

三村 純也 選

特選

風音の高く過ぎゆく晩稲刈

大阪 伊藤 とし子

晩稲は、十月も下旬、霜が降りるのも近い頃に収穫される。従って、風も冷たく強くなり始めた頃に刈り取るのである。寒さを覚える中での作業かもしれない。そんな感じが、風音が高く過ぎてゆくところから、伝わってくる。

早鞆の瀬戸の潮鳴り鷹渡る

福岡 衛藤 知香

早鞆の瀬戸は関門海峡の最も狭いところで、源平の合戦で平家が亡びた壇の浦もここに位置する。潮の流れも速く、潮鳴りも高い。その上を鷹が渡ってゆくのを発見した作者。その心の昂りが、歴史を背景とした大景とともに描かれている。

……題詠「人」……

人の足踏みては詫びて鸞替ふる

大阪 奥野 とみ

「替えましょ、替えましょ」と大勢の人が素早く學を替えてゆく。何しろ群集雑踏の中でのことだから、夢中になっていると、うっかり人の足を踏んでしまうこともある。「あつ、すみません」と詫びながらも、學を替え続けている姿は、滑稽でもあるのか。

秀作

鮎落ちて山家は薪を積み始む
 鮭上る川一面を荒立てて
 渡船より郵便バイク翺雲
 しぐるるや斜に割り込む立ち飲み屋
 風花や扇びらきに蜻干して
 羽抜鶏立派な声で鳴きにけり
 強霜を押さへ付けたるトライかな
 おおげさに死んだふりして水鉄砲
 指揮の手の拳で終はる文化の日
 水打つて祇園暮色のととのへり
 葱刻み可もなく不可もなき暮し
 先生と今も慕はれ木の葉髪
 とくとくと注がれちびちび今年酒
 三度目に点くライターや冬に入る
 夏帽子声とどかねば振るばかり
 天狗にも会へさうな径朴落葉
 志願兵でしたとぼつり木の葉髪
 勲八の勲記を紙魚は喰ひにけり
 糸瓜水一升瓶を溢れ出す
 桜餅虚子を真似して三つ食らふ

……題詠「人」……

福島 酒井 芳一
 福岡 井口富士夫
 東京 志磨 泉
 大阪 角 雅行
 山口 木村たけま
 兵庫 国代 鶏侍
 東京 高橋 寅次
 石川 前田 壽子
 愛媛 岡野未由子
 埼玉 中里 芳夫
 石川 中川 計介
 大阪 畠中 俊美
 埼玉 摩庭 一光
 神奈川 松本 恍昭
 神奈川 澤井 政夫
 神奈川 前沢 五郎
 東京 藪田えり子
 兵庫 有田 耕三
 岐阜 小澤 藍加
 北海道 西井 健治
 兵庫 山田 綾子
 佐賀 萩原 豊彦
 埼玉 松枝 松風
 富山 岩城 未知
 大阪 境 雅秋

▼佳作▼ 掲載は氏名五十音順です。

埋め置きし葱立ち上る日和かな	会田 比呂	採血の痕あをあをとそぞろ寒	井口 直美	啼き交ひて万羽の鶴の引く気配	植木きよ子
初御空匂ふがごとく晴れ渡る	会田 比呂	彼岸花棚田の区画見えにけり	池田 文代	露草の金の睫に逢ひにけり	植松 節子
太平 洋望む竜馬の懐手	四十物敦子	はじめの重湯ひとさじ小鳥来る	石川 春鬼	餅配り雪の戻りとなりにけり	上村 佳与
熊皮に座して炬話はじまれり	阿久津勝利	ヘルメット脱ぎ雪吊を終へにけり	石田香緒子	鳥追ひや村の外れの戸まで	上村 佳与
二階まで声の届きし帰省かな	朝川 晴也	着ぶくれて待合室の固き椅子	石原 良彦	紅葉且つ散るカンバスは白きまま	有子山俊之
満員の坊ちゃん列車春の風	浅山美津子	木枯や海から遠き異人墓地	和泉 豊	侮りて落葉の深み女坂	有子山俊之
座ぶとんに眠るややこの初雛	安部 朝子	大原を巡れば時雨いくそたび	伊瀬知正子	挨拶をする子しない子冬の朝	内山えいじ
廃業の銭湯の煙突の冬	安部じゅん	初霜を踏んで朝刊配りゆく	伊瀬知正子	恙無く生きたる証日記果つ	江頭けい子
ミカンノハナサクの電報入学す	阿部千栄子	滾りつつ雪嶺へ没る夕日かな	市毛 文夫	朝顔の日ごと小さく濃むらさき	江見 栄
手に息し行商座せり雪催	荒井 修	目覚めれば浦島太郎雪の宿	伊藤 如風	大寒や松青々と陵守る	江見 栄
搬入に天狗が揃ふ菊花展	荒井 千枝	二杯目のアールグレイに秋深む	伊藤 哲	おもさしを浮かべセーター選びをり	村上 無有
父右手母は左手七五三	荒井ハルエ	脱ぎすてて己が姿の冬木立	伊藤はじめ	色づきて火種のごとき烏瓜	遠藤 東子
くさめしてもとの美貌にもどりけり	有澤 嘉晃	園寒し海驢卑しき声で鳴く	稲井 夏炉	山頂の城冬雲を従へて	大内 洋子
運ばるる湯葉や豆腐や時雨けり	粟村 勝美	煮凝や旅の妻より遠電話	稲井 夏炉	搔卷の重さ嬉しき安寝かな	大島 幸男
別人と思ひマスクとすれ違ふ	粟村 勝美	もてなしの茶漬は瀬戸の桜鯛	井上由美子	放哉の鳥オリープの赤く熟れ	岡田 貞子
六地藏 一体づつに日脚伸ぶ	安藤 加代	白魚を一合升で求めけり	井口富士夫	読みさしの本を重ねし夜長かな	岡本 正
機音の今も秩父の秋遍路	飯岡 敬子	町内の得点表や運動会	今井 哲也	実南天たちまち鳥に知られけり	小川美津子
山門を小さく構へて紅葉寺	飯野 定子	グラウンドの球児に釣瓶落しかな	入谷 一舟	縁談のとんとん進む十二月	荻野 邦子
いち早く野仏の辺の草青む	飯野 定子	ICU出で来し窓に後の月	岩城 未知	紅葉狩魔法瓶より酒を注ぎ	奥 可津女
寒北斗見えぬ一つに妻を恋ふ	生田比呂志	銀杏散る六百年の高さより	岩崎とし恵	子規宛の虚子の文読み春惜む	奥野 とみ
風邪もらふ異国のやうな東京に	山内 雪	初雪を告げる車掌のアナウンス	植 朋子	閑さうな占師ゐて神の留守	奥野 とみ

蜻蛉とぶ松山城の空広し	奥山 功	作務僧の美男も混じり落葉搔	小池 博美	充たされてなんでさびしき春の宵	芝田 太
坂がかかる内子の町のおぼろかな	尾高 好子	蒲団干す働き者の振りをして	小池 博美	踏みしめる落葉の嵩にある湿り	島崎多津恵
防犯灯いきなり点きて暮早し	織作 香代	紅葉かつ散る空海の座禅石	合田マサル	終戦日兜太の思ひ繋ぎゆく	島田 公子
木の実落つ読経の長き墓仕舞	柏瀬眞理子	これよりは日和だのみの蕎麦の花	神谷 かよ	下駄箱に夫の匂ひの冬帽子	清水喜代美
虫食ひの子規の文机冷まじや	加藤 清美	にぎり飯頬張りながら根釣かな	神谷 かよ	暮れぎはの引戸の軋み冬近し	清水 孝雄
しぐるるや大街道の屋根途切れ	加藤 鮎物	一枚は秋桜咲かせ棚田守る	香山 直子	時の日や句座は無言の時刻み	志村 芳子
「追い焚きをします」寒夜のワンルーム	加藤 申女	達人と一目で分かる踊かな	小林 七重	手の機嫌水の機嫌や紙を漉く	下村たつゑ
蒼穹を絞り込みたる鷹柱	金子 恵美	夕映に海鳥揃ふ冬岬	金 民子	けふもまた雪搔く一と日明けにけり	城山 憲三
廃線の駅舎を濡らす秋の雨	神根 信	さつきまで河童が居たと櫓の宿	金野 秀次	縄電車解かれ園児は落葉中	神野 信美
碧空へダム放流の紅葉谷	河野 里江	悴む手母は無言で包みけり	坂本キョカ	短日の籠抜きん出る長大根	末廣 瑛子
いい風ねそうね桜も咲く頃ね	河村 章	山眠る父母の奥津城抱きつつ	坂本 富子	神の留守巫女の口紅濃かりけり	杉江 茂義
ワインの栓ぽんと抜かれて聖夜来る	川村 幸子	居酒屋に信楽狸蚊遣豚	笹内かた梨	小鳥来て澄みわたりゆく朝の空	杉崎よしこ
前略と書いて進まぬ夜長の灯	北川 溪舟	スカートのと丈揃ひたる入学式	貞住 昌彦	泳ぎつつ水鳥とくに羽繕ひ	杉崎よしこ
梅一輪空の硬さをほぐしけり	木下 薫	別れとはまた逢へること梅ふむ	佐藤 和成	町名に残る城址十三夜	杉本蒼生子
全集は電子書籍に漱石忌	木下 恕子	笹粽昔の知恵の紐ほどく	佐藤 昭治	手廻しで削る鉛筆文化の日	須崎咲久子
子規庵の庭枯れ残る鶏頭花	木下美津恵	鬼の子に山風募るばかりなり	佐藤 てい子	灯火親し座右に芭蕉七部集	鈴木 澄雄
片隅に父祖の墓ある冬田かな	木原 登	蝗捕り鉛筆五本貰ひたり	佐藤 敏文	主治医より外出の許可日記買ふ	鈴木 武
台風が来るぜと甥のLINEかな	木俣 道子	手に重き水を宥めて紙を漉く	佐藤ます子	縦のものの横にもせず炬燵守る	角 雅行
憎まれ口きいて布団に潜り込む	木村 揚子	構へたる一寸ほどのいぼむしり	佐藤 美保	一杯のコーヒーにある秋思かな	関根 瞬泡
白い歯ときれいな肩がプールから	清島 久門	帯揚げはからくれなるや着衣始	佐野 明美	正直に生きる幸せ福寿草	瀬端 忠男
目印にくつつ下黄色運動会	久保 明美	山寺に賓頭盧なづる菊日和	佐野 涌子	携帯を鳴らして捜す春の昼	瀬端 忠男
突堤に釣人並ぶ島小春	久保 米子	大橋の暮れて小島に今日の月	椎原美佐子	霧襖見知らぬ街に在ることし	瀬端 忠男
雲水の只管打坐なる溽暑かな	栗山美津子	漱石忌猫眠りゐる古本屋	塩川 隆三	見送られ島遠ざかる晩夏かな	千田るり子

子規庵に届けたきかな柿たわわ	高島 文江	おもちゃ箱ばらまくごとく小鳥来	中島 みつ	瀬戸の風からませ傾ぐ懸葉かな	羽廣 竹夫
小春日や子規球場に打球音	高島 文江	ものぐさのおのれを叱り買ふ日記	中空 善彦	パレードに狼も居てクリスマス	濱田真知子
越後よりどすんと届く今年米	高橋 和湖	子午線の街をはなるる月高し	中根 武郎	大事な小事となりて暦果つ	林 すみ
懐かしむあの日あの時古曆	高林 慶吉	風の墓所訪ふのみの里帰り	中本きみよ	木の葉髪ひつつめ教師三十年	原 道子
源泉の音や万緑きらめきて	高原 晴子	本物の犬とび入りし村芝居	中本きみよ	稲刈りしあとの匂ひの広さかな	馬場 弘子
天ぶらにせよと諸手へ穂の芽を	高原 晴子	雪ばんば遺骨なき墓並びたり	中山 麻子	天空の城を掠めて鷹渡る	久留 紀子
柚子添へて古里よりの宅急便	高山 洋子	仏面して煩惱の日向ぼこ	奈良 弘	真つ新の禪ひとつ井戸浚ふ	久永のり尾
星ひとつ生まれて芒原さわぐ	滝浪 武	帰り花見過しさうな高さかな	西尾 青雨	一茶忌や雀少なき町に住む	毘舍利愛子
朝顔や始発電車の音が行く	武井 良子	母の手の林檎うさぎとなる魔法	西島ちはる	街頭に犬も一役社会鍋	毘舍利愛子
伐る人も買ふ人もなく山眠る	武市 宣子	天辺へ土手駆け上る曼珠沙華	野島 巧休	天辺に幾つか残り木守柿	平林けい子
身に馴染む母の手織の秋裕	田島 貞子	役終へし案山子をつつむ夕日かな	野田 彰子	廃墟にも遺産の指定草の花	平林 佳治
渾身の息では鳴らぬ瓢の笛	田中 里香	春を待つ病む話などするまじく	野間 泰子	手術室ひたと閉ざされそぞろ寒	福士 重子
奏者待つコントラバスとしわぶぎと	谷 茂男	吹き抜けて秋風止まるところなし	野村 瑠以	つまみよし仲間なほよし爛熱く	福士 重子
どちらからともなく手と手蚩狩	種元弘一郎	流派なく壺いつぱいの秋桜	野村 瑠以	ガチャポンにハロウインの魔女転がり来	藤井 祐喜
古妻とスマホ操る日向ぼこ	田村 武雄	露の世や父の遺言聴けぬまま	萩原 豊彦	長靴の引つ掛りをり崩れ築	藤田 信義
秋風や思ひ浮かばぬパスワード	丹野 裕	祭笛拍手をすれば笑み返る	橋爪ひさ子	日向ぼこ命の端を暖むる	藤田 信義
直ぐ忘るる今日の運勢日向ぼこ	塚原味紀枝	水鉄砲打ち合ふ子等の声弾け	橋爪ひさ子	駅のどか足湯しながら電車待つ	藤根 豊
女の子ばかり五人や亥の子打つ	富岡 道子	きつつきの神木たたくこだまかな	橋本 久子	搾乳の牛も農夫も息白し	藤林 正則
島一つ若葉の山となりにけり	富沢 昌晴	学僧の読経洩れくる白障子	橋本 久子	枯蟪螂明治男の貌したる	渕野 栄子
一年生さつと手を上げ横断す	寅屋 照夫	小鳥来る今日は玻璃戸を拭く日和	羽立 和子	鍋蓋を上げて吾を呼ぶおでん種	保永美代子
吟行と称する散歩草の花	直井 照男	秋遍路雨の日暮を急ぎゆく	畠中 俊美	世の中に遅るるもよし秋簾	前 九疑
宿坊の薄氷残る手水鉢	中沖 稔	大寺の一ト月掛けて松手入	畠中 俊美	古民家の土間を抜けゆく鬼やんま	町田 定夫
子規を恋ひ松山を恋ひ秋高し	中川 圭子	地下足袋を濡らして洗ふ大根かな	服部 正	林檎剥く円周率の果てしなき	松井 治美

日の合ひてくちなは道を譲らざる	松井 洋子	凧に押されあらがひ子ら駆くる	村橋 克雄	一日の始まる日射し小鳥来る	吉積 漫歩
あらぬ方へ首振る駅の扇風機	松井 洋子	四国まで見ゆる高きに登りけり	村橋 克雄	期する事さしてあらねど春を待つ	吉本隆太郎
凧ひとつ上がる河原の二日かな	松井 洋子	駄菓子屋もつひに閉店一葉忌	目黒 輝美	筋交ひに靴跡のある冬田かな	若林 絹代
棧橋の端の端まで蜜柑箱	松下 乃湖	茶の花や正面に富士どんと置き	百瀬 信之	夜咄の祖母は白寿となりけり	若林 正人
一本で五品の大根料理かな	松本 和子	悪役が人気をさらふ村芝居	森 京子	十二月八日おばあのみない海	渡部 秀美
ひたすらにグラスを磨く秋思かな	松本ちずる	旅浴衣道後の湯の香惜しみけり	森清 千代	母の膝恋し小春の縁側も	渡辺 葉月
圏外の表示にふて寝帰省の子	松本 喜雄	畳なはる英彦山坊跡の枯芒	森島 邦彦	……………題詠「人」……………	
近づけば遠のいてゆく猫の恋	松山 真弓	数へ日や読みつつ縛る古雑誌	森田 里華	椎の実を縄文人の血が拾ふ	青木 孝子
三三五五夕日に映えて赤蜻蛉	三喜 万敏	警ら箱閉づや見上ぐる燕の巢	森 哲州	人の字のごとく寄り添ふ日向ほこ	赤繁 忠弘
おかめ売れ柝のひびきや酉の市	溝呂木勲忠	排雪の笛よもすがら天に返つ	矢萩 邦子	炭を焼く老人ひとりそれが父	秋山 観水
我先に寄り来る鯉や春近し	味村 京子	手負ひ猪犬一匹を殺しけり	山内 茉莉	友以上恋人以前夜の秋	天谷 敦
少年のかくも無口や冬りんご	宮口 和子	袖口の白墨汚れ冬に入る	山内 茉莉	腰据えて値切る人ゐる師走市	粟村 勝美
こんな夜は何より馳走根深汁	三宅為佐江	踏み鳴らす三鬼の郷の霜柱	山口かずお	落葉径一人の影をひとり曳き	安藤 加代
国生みの島の御陵神渡し	三宅 昌子	夏惜しむ草田男の忌の沖見遣り	山口かずお	人声に見上げてみれば松手入	井坂 史子
狛犬を撫でて帰りぬ神の留守	宮崎 清美	搗き立ての供米捧げむ親鸞忌	山口美由喜	二人にはあまる部屋数煤払	石川 明
朝礼の全校生徒息白し	宮下 狂子	小春日の堤釣れても釣れずとも	山田 綾子	旅人も借りる菅笠風の盆	磯崎ゆきこ
湯豆腐や手酌に馴れし老いの日々	宮田庄三郎	教へ子の賀状停年迎へしと	山田 浩子	猫の髭切りし人居て漱石忌	磯野 圭甫
駅前の商人宿や花八手	宮田庄三郎	一日に一客の宿枇杷咲けり	山本あかね	忘年会いつも遅れて来る一人	伊藤とし子
腹這うて書を読む子規の忌なりけり	宮野しゆん	東京スカイツリーに懸かる今日の月	山本キヨ子	はらからの九人育ちし黴の家	稲井 夏炉
天高し城をガイドの伊予訛	村上 和徳	御講膳てきばき運ぶ割烹着	山本キヨ子	霧動き展望台に人の影	岩崎 幸邦
肩代へて揉み合ふ浦の荒神輿	村田 浩	冬ざるるもの一つに古城かな	横田青天子	寄せ鍋の一人欠けたる家族かな	岩野 記代
見えそむる結願札所初しぐれ	村田 寛文	神無月荒鋤きすみし田の白く	横山ツヤ子	訪ね来る人なき家の蔦青し	上ノ山陽子
飛び来たるやうに一輪帰り花	村橋 克雄	採る人も無くぜんまいの伸び上がる	吉田 和司	落慶の人出あふるる寺小春	内田 陽子

一徹の人も打解け年忘れ 梅田ひろし
 義仲寺を訪ふ人多き時雨月 大久保文夫
 過疎の村皆お人好し山笑ふ 太田かつ子
 猫の子のさみしいときは人舐める 岡田 春人
 閉校の一人に卒業証書かな 奥村 利夫
 余生にも十人十色石路の花 小澤 藍加
 人の世はこんなものかと日なたほこ 春日 良江
 噴水や大道芸に人まばら 加藤 三朗
 人気なき野外劇場桐一葉 加林 悠
 七人を育てし母の終戦日 君塚 郁子
 花冷の愚陀佛庵に人の声 清島 久門
 担ぎ手はブラジル人の浦祭 清島 久門
 病窓に一人占めする揚花火 清島 久門
 着ぶくれて私はわたし人はひと 忽那 早苗
 よく笑ふ人を真中に初写真 蔵 堯子
 旅人となりて故郷の花の宿 黒山 敏恵
 寄せ鍋や八人家族四世代 源通 清信
 五月人形手作り兜も飾りけり 源通ゆきみ
 里人の持て成しくるる焚火かな 小柴 智子
 独り呑む人肌の酒衣被 小平 貞
 尋ね人とふ番組ありし終戦日 小塚 信江
 スーパーの人混み年の詰りくる 近藤 静
 ゆるゆるると人は老いゆく返り花 齋藤 伸光
 地図を手にも一人遍路の風となる 佐々木利正
 海人のタトウー隆々雲の峰 眞住 昌彦
 柚人の斧で柿むく昼下り 佐藤 孝志
 受験子の人と書いては呑み込みぬ 佐藤 美保
 筆跡に人柄にじむ賀状かな 志田 彰子
 人影の無き山里の柿花火 杉崎よしこ
 挽ぐ人のつひぞ無かりし榎櫃の実 瀬古 祥子
 人日や俎板の疵日に晒す 滝浪 武
 人垣のここにも出来て街師走 竹内はるか
 われ一人帰る枯野の遠あかり 田中 阿以
 一人居の一人暮らしの年の暮 田村 昶三
 唯一人阿蘇縦走の枯野道 辻 洋子
 雪しづる己が一人の飯盛れば 寺西 光子
 人恋ふがごとく馳け寄る羽抜鶏 中島 みつ
 武士の面の白さや菊人形 永田 満男
 二人欠け二人復帰の納句座 中根 武郎
 人恋ふる山羊の鳴きごゑ冬うらら 中山 幸子
 人ひとり通れるほどの花野径 西村 妙子
 新人を入れて新年句会かな 日光 正春
 村人の守る 山道藪柑子 二橋 康男
 大焚火旧知のごとく人の寄り 能田 孝昌
 二人居て話すでもなく炬燵守る 野中 憲子
 麦蒔くや無人踏切たまに鳴る 橋本 久子
 訪ふ人もなき山寺の萩を刈る 畠中 俊美
 山越えの一人遍路の鈴の音 藤 文萌
 人日や人と生まれて何をせし 風街ゆう子
 金賞の菊人形に添ふ笑顔 平古場志郎
 人混みの中の絵日傘高く持ち 藤田ミチ子
 湯治場の千人風呂の薄紅葉 藤原 恋水
 築堤に人柱の碑曼珠沙華 本田 岳風
 撮る人も撮らるる人も祭り顔 増田 信雄
 浮雲は空の旅人合歡の花 増田よしこ
 鳥雲に子は東京の人となり 松井 洋子
 人捌くデイージェイボリス去年今年 松本 弓子
 乗り遅れ無人ホームの日の盛り 三浦 一志
 畦道を報恩講の人の列 宮崎 尚範
 人並みに生きて八十路や鳥雲に 宮本 秀峰
 人気なき衛士の番小屋小鳥来る 向井 昭子
 村人の誰ぞに似をる案山子かな 村橋 克雄
 あんぱんを買ふ人の列瀬祭忌 目黒 輝美
 忘年のマイクに一人二分づつ 森 早和世
 人ひとり通れる道の秋の暮 山岸 すす
 猪肉を肴に雪の夜の一人 若林 正人
 冬耕の人みな老いてしまひけり 綿引多美子

NHK学園生涯学習フェスティバル
松山市俳句大会

入選作品集

平成三十一年二月二十四日発行

編集発行 N H K 学 園

〒一八六―八〇〇―一

東京都国立市富士見台一三六―二

電話 〇四二―五七二―三二五二(代)

印刷 明誠企画株式会社

作品集の作成にあたっては、あきらかな誤字・脱字
以外は、原作のまま掲載いたしました。
誤植など不備な点がございましたらお許しください。
また落丁本はお取り替えいたしません。

実作力アップコース

名句で学ぶ！

表現の幅を広げたい方に

俳句 表現のコツ

- リフレイン、押韻、オノマトペ、一物仕立など、俳句の表現テクニックや効果を学びます。今まで知らずに使っていた表現方法やより効果的な使い方を再確認することで、表現の幅はぐんと広がります。
- レポート課題は3回。各レポートには作句課題がありますので、テキストで学んだ知識が実作で使えているか確認できます。

上級者のためのコース

俳句倶楽部

- 俳壇の第一線で活躍中の講師によるワンポイント・アドバイスと、会員同士の誌上句会を楽しむ、俳句上級者のためのコースです。大会や雑誌の投句で、より上位の賞を目指す方におすすめです。

ワンポイント・
アドバイスが
受けられます

ワンポイントアドバイス講師
(2019年2月)



井上康明
「郭公」



岩岡中正
「阿蘇」



片山由美子
「香雨」



小浜杜子男
「鷹」



高野ムツオ
「小熊座」



寺井谷子
「自鳴鐘」



西村和子
「知音」



三村純也
「山茶花」

- 受講期間1年(自動継続)
- レポート提出9回(ワンポイント・アドバイス投句5句×4回、誌上句会 投句2回、互選2回、コンクール1回)

教材

レポートセット

〈別送〉機関誌(4冊)

「誌上句会 投句集」・「誌上句会 作品集」(各2冊)

◆「俳句倶楽部」の特徴

レポート

- ・ワンポイント・アドバイスは全4回(1回につき、自由題5句提出)
 - ・あなたの提出作品に、俳壇で活躍中の著名な実力派俳人が一言アドバイス。
 - ・希望の講師を選べます。
- ※各講師には定員があります。一定数を超えた場合、ご希望の講師のアドバイスを受けられないことがあります。

誌上句会

- ・誌上で「句会」を楽しみます。
- ・会員の自選作品を掲載した作品一覧から2句選び(互選)、高得点の作品を作品集で発表します。

コンクール

- ・年1回のコンクールは「俳句倶楽部」会員同士で腕を競います。全投句作品が作品集に掲載されます。

有馬朗人、宇多喜代子、大串 章、
コンクール選者 黒田杏子、鷹羽狩行、深見けん二、
星野 椿、宮坂静生

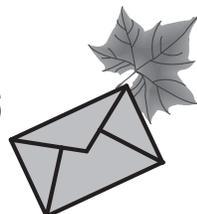
講座の詳しい案内パンフレットを無料でお送りします。



0120-06-8881 FAX042-574-1006

フリーダイヤル

〒186-8001 東京都国立市富士見台 2-36-2 NHK学園 6B05 係
ホームページ <http://www.n-gaku.jp/life>



NHK学園 松山市俳句大会 入選証他専用額・トロフィーのご案内

「松山市俳句大会」ご入選おめでとうございます。ご入選の記念にいかがでしょうか。

《入選証》 1通 1,500 円

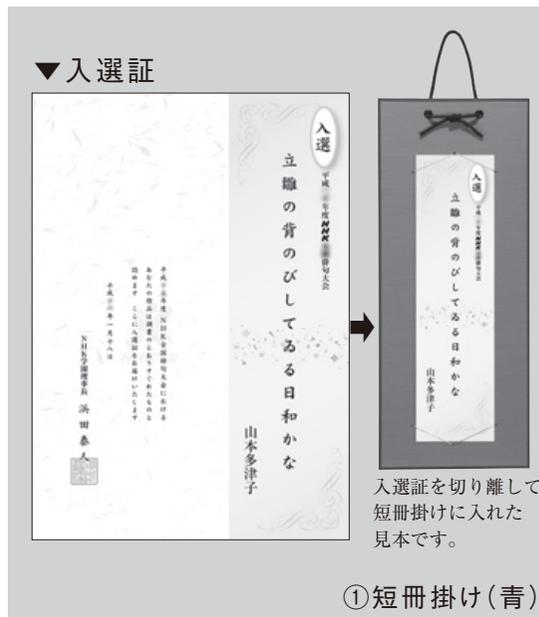
- * A4判（297×80 ミリ）でお届けします。
- * 切り離して短冊にすることが出来ます。
- * おおむね1か月でお届けします。

《専用額》

- ①短冊掛け（青）
材質は和紙、壁掛け用です。
1枚 1,500 円（税・送料込）
- ②額（クラシックゴールド）
上品なデザインで卓上・壁掛け両用です。
1枚 2,500 円（税・送料込）

《トロフィー》

- 作品をトロフィーにお彫りいたします。
1つ 13,000 円（税・送料込）
- * 専用申込書をお送りください。郵便局からの払込票をお届けします。
ご入金確認後からお作り始めます。お届けまでに1か月ほどかかります。



キ.....リ.....ト.....リ.....

平成 30 年度 NHK学園 松山市俳句大会 トロフィー専用申込書

ご住所 〒 _____

お名前 _____ 電話番号 _____

掲載P	選者名	賞名	作品（全文を記入してください）	数	金額

お申し込み方法 ①または②をお選び下さい。

①定額小為替の場合

下の申込書に必要事項を記入し、定額小為替（郵便局で購入）を同封して、封書でお申し込みください。

※定額小為替には、何も書かないで下さい。

②郵便振替の場合（払込取扱票そのものが申込書になります）

郵便局で取り扱っている払込取扱票の通信欄に（1）大会名、（2）作品の掲載ページと作品全文、（3）枚数、（4）選者名（希望の方のみ）、（5）賞名、また短冊掛け・専用額を希望の場合には（6）商品名、（7）数量を必ず明記してください。金額欄に合計金額を明記して、下記の口座へお振り込みください。

入選証および専用額トロフィーの
申込先・連絡先
〒186-8001（住所記入不要）

N H K 学園教材サービス
松山市俳句大会入選証係
TEL 042-572-3151（代）

← 切り取って
封書のあて名に
してください

<郵便振替の専用口座>

	口	座	記	号	番	号						
0	0	1	9	0	7		5	6	3	6	0	8
加入者名	NHK学園教材サービス											

- ※ いったんお申し込みいただいた後のご返金はいたしかねますので、ご了承ください。
- ※ 過去の地方大会の入選証については、平成11年度以降のものに限ります。
- ※ 郵便振替の場合、下の申込書及び振替払込受領証のご郵送は必要ありません。
- ※ 申込書にはお名前、ご住所、電話番号をお忘れのないようお願いします。

定額小為替専用

平成 30 年度 N H K 学園松山市俳句大会

入選証および専用額申込書

名 前	フリガナ	受講者番号									
住 所	〒										
電 話 番 号	-										

○入選証

掲載誌 ページ	選者名 (希望の方のみ)	賞名	作品（全文を記入してください）	単価（1枚）	枚数	金 額
				1,500 円		
				1,500 円		
				1,500 円		

- ◆特選・秀作・佳作の作品には希望される方のみ、選者名が印字されます。
- ◆同じ句を複数の選者から選ばれた場合は、選者別の発行（1選者1枚）になります。ご希望の選者名を明記してください。
4枚以上希望される場合にはお手数ですがコピーをしてご記入ください。

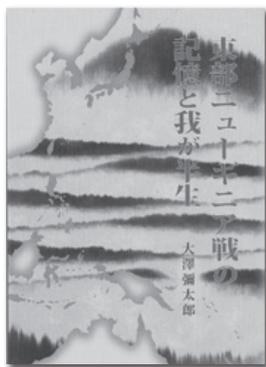
○専用額 ※ 専用額には入選証は含まれません。

短冊掛け（青）	数 量	1,500 円 ×	枚	金 額	
額・クラシックゴールド	数 量	2,500 円 ×	枚	金 額	

合計金額 _____ 円 を定額小為替で同封します。

※ 振り込みの場合は、この用紙のご郵送は必要ありません。

あなたの学びを 「本」にまとめて みませんか



日々の出来事や想いを詠んだ俳句や短歌を

一冊にまとめてみたい。

あなたの人生と大切な作品を

一冊の本にしてみませんか。

NHK学園の 自費出版



学習の成果を1冊に

人生の節目に本を出版される方が増えています。自分のための1冊、家族に贈る1冊。お手元の学習レポートがそのまま原稿になります。

NHK学園の講師がサポート

各分野の講師があなたの本作りをサポートいたします。添削はもちろん、構成やレイアウトもお任せください。跋文も書き添えます。

ご相談・お見積もりは随時

思い立ったら是非一度ご相談ください。学園宛に原稿をご送付いただければ無料でお見積もりもいたします。

合同作品集

全国の仲間とともに一冊の本を仕上げる楽しさが味わえる合同作品集。合同歌集「さくら」、合同句集「くにたち」、川柳合同句集「ふじみ」、「昭和・平成の時代を生きて」など特定のテーマに沿って文章を綴る企画作品集。

俳句、短歌、自分史、エッセイ、アート、絵手紙、書道、写真など、学習の成果を自費出版される方を全面的にバックアップいたします。

2019 出版個別相談会(参加費無料・予約制)

開催日	開催地	会場
2019年2/15(金)	姫路	ホテル姫路プラザ
3/15(金)	名古屋	キャスプルプラザ
4/5(金)	東京・市ヶ谷	アルカディア市ヶ谷
4/19(金)	水戸	水戸三の丸ホテル
5/23(木)	高松	高松シティホテル
5/24(金)	高知	高知サンライズホテル
6/20(木)	福岡・天神	アークロイヤルホテル福岡天神
6/21(金)	宮崎	エアラインホテル
7/26(金)	新潟	アートホテル新潟駅前

開催日	開催地	会場
8/22(木)	福島市	ホテル福島グリーンパレス
8/23(金)	青森	ホテルJALシティ青森
9/13(金)	東京・市ヶ谷	アルカディア市ヶ谷
9/27(金)	甲府	ホテルクラウンヒルズ甲府
10/25(金)	金沢	ホテル金沢
11/14(木)	京都	メルパルク京都
11/15(金)	和歌山	シティイン和歌山
12/13(金)	小田原	小田原お堀端コンベンションホール

*相談会にご参加できない方で、原稿をお持ちの方は別途ご連絡ください。場合によっては直接お伺いします。

下記の時間枠を設定、先着順ですでお早めにご予約ください。

①10:30～11:30 ②11:30～12:30 ③13:30～14:30 ④14:30～15:30

- 予約制ですので、ご希望の開催地・時間枠をご連絡ください。
- 会場にご来場できない方、遠方にお住まいの方は、お電話やお手紙にて承ります。
- NHK学園本校(東京・国立市)では個別相談を随時行っております。事前にご予約ください。

原稿は揃っていないなくても大丈夫! まずはご相談ください。出版アドバイザーがいていねいにご説明します。

お問合せ NHK学園 自費出版係 ☎042-572-3151(代) FAX 042-572-0061

あなたの俳句を、全国の俳句仲間のみならずと合同句集として1冊にまとめてみませんか。

小島 健先生・鈴木章和先生 選句・鑑賞文

第29集

合同句集『くにたち』

～はじめてでも安心!～

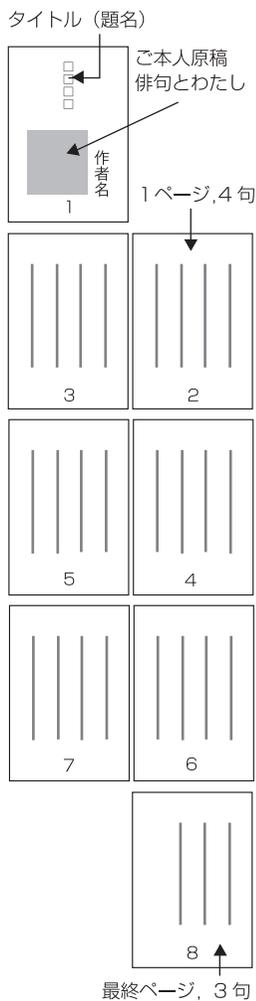


レポート・大会・スクーリングなどを通して、たくさんの作品がお手元におありのことでしょう。NHK学園俳句講座の小島 健先生・鈴木章和先生が選句（一部添削を含む）。この中から1句の鑑賞文を配本時に別紙にてお付けいたします。また、ベテラン編集者がていねいに本づくりのお手伝いをさせていただきます。どうぞふるってご参加ください。お待ちしております。

予約申込
受付開始!!



装幀／菊地信義
発行／NHK学園



応募要項

募集締切 平成31年4月30日
発行 平成31年8月初旬(予定)

◆作品について

おひとり40句お送りください。
27句に選句し掲載します。
※鑑賞文は掲載せず、応募者個別に完成後別紙にてお渡します。
参加応募用紙をお送りいたしますので、下記あてにご請求ください。
※すでに発表された作品でも結構です。

◆合同句集『くにたち』の仕様

サイズ：四六判（たて18.8×よこ12.8cm）
製本：上製本（ハードカバー）カバー付
お一人様：8ページ 1ページに4句掲載

◆参加費用 おひとり74,000円（全経費・税込）

●掲載された合同句集『くにたち』第29集 20冊配本参加応募用紙をお送りいたします。参加ご希望の方は下記へご請求ください。

教材サービス『くにたち』係 TEL 042-572-3151 (代)

NHK学園 〒186-8001 東京都国立市富士見台 2-36-2 FAX 042-572-0061

生涯学習フェスティバル俳句大会 投句要領

全国各地や誌上での俳句大会を開催しています。どなたでもご参加いただけます。

規定の用紙（コピー可）でご投句ください。

ひとり何組でも、どなたでも応募できます。（自由題二句または自由題二句＋題詠一句）

◆題詠 ※題詠は題からイメージされる作品募集となります。

※題詠のみの応募はできません。

◆未発表の自作に限ります（作者本人からの投句に限ります）。

◆二重投句は固くお断りいたします。

◆投句後の作品訂正、さしかえはできません。

◆同一作品、酷似作品が先行して発表されていた場合、入選・入賞を辞退していただくことがあります。

投句料

①自由題二句の場合 2、000円

②自由題二句と題詠一句の場合 2、800円

それぞれ、一冊の入選作品集代を含みます。

送金方法

◆郵便為替（定額小為替、普通為替を郵便局で購入）、現金書留、郵便払込のいずれかをご利用ください。（切手の代用は不可）

郵便払込をご利用の場合

郵便局においてある、郵便払込取扱票の通信欄に大会名、組数と投句料をご記入の上、払込みください。受領書のコピーを「のりづけ」欄に貼り付けて、ご応募ください。

口座番号…00190-5-336869

加入者名…NHK学園俳句大会事務局

賞・発表

◆大会大賞（文部科学大臣賞の候補作品となります）、市長賞、選者特選・秀作・佳作など。

◆特選・秀作内定者には事前に文書でお知らせします。

投句された方には当日会場で入選作品集をお渡しします。（誌上大会を除く）

会場参加されない方には、大会終了後に郵送します。

◆入選・入賞作品は、NHK学園で使用させていただくことがあります。

平成31年度 NHK学園生涯学習フェスティバル俳句大会開催（予定）

大会名称	開催(発表)予定日	投句締切	題	会場
鎌倉市俳句大会	5月17日(金)	3月1日	*山	鎌倉芸術館 小ホール
伊香保俳句大会	6月26日(水)	4月5日	*温	伊香保温泉 ホテル天坊
武蔵野市俳句大会	8月3日(土)	5月17日	*野	武蔵野市民文化会館
月山俳句大会	10月23日(水)	7月1日	*信	山形県 西川交流センター「あいべ」
誌上俳句大会	2020年 3月10日(火)	12月22日	*道	_____

*題詠は題からイメージされる作品募集となりますので、作品に題にある漢字がいらなくても結構です。

鎌倉市俳句大会

（神奈川県鎌倉市）

古都・鎌倉にて行われる大会です。
この俳句のつどいにぜひご参加ください。

投句募集

自由題二句、題詠一句

題詠は「山」（テーマ詠）

題詠は「山」の漢字が入らなくても結構です。

投句締切

二〇一九年三月一日（金）消印有効

日時

二〇一九年五月十七日（金）

午後一時～四時

会場

鎌倉芸術館 小ホール

鼎談

「俳句の力」

宇多喜代子・星野高士・星野椿

選者

宇多喜代子・高柳克弘

星野高士・星野椿・堀本裕樹

（五十音順・敬称略）

当日句募集（無料）

題「鎌倉の夏を詠む」

当日、会場で作句一句をお出し下さい。

入賞作品は会場にて発表いたします。



瑞泉寺

臨済宗の高僧夢窓国師が建てた禅刹。鎌倉石の岩盤を掘って作られた庭は禅刹庭園の原点とも言うべく、国の名勝に指定されている。山号は錦屏山、寺域が紅葉ヶ谷と呼ばれる所以。



鎌倉まつり（流鏝馬）

昭和34年から行われている鎌倉の春の恒例行事。鶴岡八幡宮を中心に、鎌倉武士を偲ばせる勇敢な流鏝馬、華麗な静の舞など、さまざまな行事がとり行われます。



江ノ電（七里ガ浜～稲村ヶ崎）

藤沢から鎌倉の10.0kmを結ぶ、海沿いを走る風光明媚な路線。



鎌倉花火大会

夏の一大イベント。みどころは海の花火大会ならではの水中花火。扇のように広がり、水面に豪快な半円の花を咲かせます。砂浜にもドーンという振動が伝わり、迫力満点です。

伊香保俳句大会

群馬県渋川市

今回で27回目となる恒例の大会です。

まだお越しでない方はぜひご参加下さい。

◇投句募集

自由題二句、題詠一句

題詠は「温」（テーマ詠）

題詠は「温」の漢字が入らなくとも結構です。

◇投句締切

二〇一九年四月五日(金)

消印有効

●日時

二〇一九年六月二十六日(水)

午後二時～四時

●会場

伊香保温泉 ホテル天坊

●選者

小澤 實・木暮陶句郎
鶴田智哉・西村和子

(五十音順・敬称略)

◇当日句募集

題「伊香保の夏を詠む」

当日、会場に自作一句をお持ち下さい。

入賞作品は会場にて発表いたします。

◆伊香保俳句大会へのご参加をお待ちしています。



伊香保の町

湯の香ただよう石段街の町、伊香保。昔ながらの温泉情緒に加え、「俳句の街」としても多くの方々に親しまれています。そんな、伊香保ならではのひと時をお楽しみください。

多彩な魅力に満ちた、

伊香保の温泉情緒

湯がでたのは、かれこれ二千年も前の話。長い歴史を持つ群馬県伊香保温泉の町並みは、名所石段街を中心に、昔ながらの素朴な温泉情緒でいっぱいです。石段をのぼり切った湯元温泉地横に、こじんまりとした佇まいながら開放感いっぱい露天風呂が広がります。伊香保の湯は昔から子宝の湯として知られ、温度は43～45度、茶褐色でまろやかな湯質が特徴です。



石段街

句碑のご案内

湯けむりとともに句碑めぐり

